

国道9号線バイパス建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

(石台遺跡)

平成元年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、松江地区の一般国道9号の交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、松江バイパスを建設しています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ関係機関と協議しながら計画していますが、避けることの出来ない文化財については道路事業者の負担によって必要な調査を実施し、記録保存を行っています。当バイパスにおいても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の御協力のもとに昭和50年度以降現在まで約3億5千円の費用を投じ発掘調査を実施しております。

本報告書は、昭和63年度に実施した石台遺跡調査の結果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも充分留意しつつ進められることへの御理解を頂きたいと思うものであります。最後に、今回の発掘調査及び本書の編集にあたり、御指導御協力頂いた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表するものであります。

平成元年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所長

土 島 知 己

序

島根県教育委員会では建設省中国地方建設局の委託を受けて、昭和63年度一般国道9号線松江バイパス建設予定地内の石台遺跡調査を実施致しました。

松江バイパスの調査は、昭和50年度から昭和57年度にかけて現在使用されている二車線の道路部分の調査を行い、61年度からは車線拡張に伴う調査を実施しております。本年度の調査区は昭和55年度の隣接地にあたり、弥生時代以降の竪穴式住居や貯蔵穴等を検出致しました。とりわけ弥生時代中期の住居跡は島根県下でも調査例が少なく、当地方の弥生時代における生活跡の実態を知る上で貴重な資料と考えております。本報告が、広く埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに多少なりとも役立てば幸いです。

なお、調査にあたり御協力頂きました建設省松江国道工事事務所をはじめ、関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成元年3月

島根県教育委員会

教育長 松井邦友

例　　言

1. 本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が昭和63年度に実施した一般国道9号線松江バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2. 本年度は、石台遺跡の調査を実施し、発掘地は次のとおりである。

　　石台遺跡 - 島根県松江市東津田町植岡

3. 調査組織は次のとおりである。

　　調査指導者　川本　清（島根県文化財保護審議会委員）、池田満雄（同）、三辻利一（奈良教育大学教授）、印中義昭（島根大学教授）、甲元真之（熊本大学助教授）

　　事務局　内藤仁男（文化課課長）、井原　謙（文化課課長補佐）、勝部　昭（同）、野村純一（文化係長）、吾郷朋之（文化課主事）、陶山　彰（島根県教育文化財団嘱託）

　　調査員　卜部吉博（埋蔵文化財第3係長）、西尾克己（文化財保護主事）、広江耕史（島根県教育文化財団文化財主事）、桑原真治（同嘱託）

　　遺物整理　三島千富美、高角恭子、植田陽子、安藤義範、二島由紀子、宮本正保、松浦　泉

4. 本書の執筆、編集は調査員が討議してこれを行い、文責は目次に表記した。

5. 本書に掲載した石器の鑑定は、西川和史（島根大学大学院）、竹下浩征（同研究生）にお願いした。

6. 本遺跡出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会で保管している。

目 次

I. 位置と環境	(西 尾)	1
II. 調査に至る経緯	(広 江)	3
III. 調査の経過	(広 江)	3
IV. 遺跡の概要		
第 I 調査区	(広 江)	7
第 II 調査区	(広 江)	7
第 III・IV 調査区	(広 江)	10
第 V 調査区	(広江・桑原)	26
V. む す び	(広江・桑原)	47

I 位置と環境

石台遺跡は松江市郊外の松江市東津田町櫻岡に所在する集落遺跡である。遺跡の範囲は広く、馬橋川下流域の沖積地からこれに接する南側の台地上を含む大規模なもので、時期も縄文時代から中世に至る。

遺跡のある馬橋川下流域は、北側の大橋川流域と『出雲国風土記』で神奈越野と呼ばれる茶臼山とに挟まれた中間地区にあたり、意宇平野周辺部とともに遺跡密集地帯を形成している。

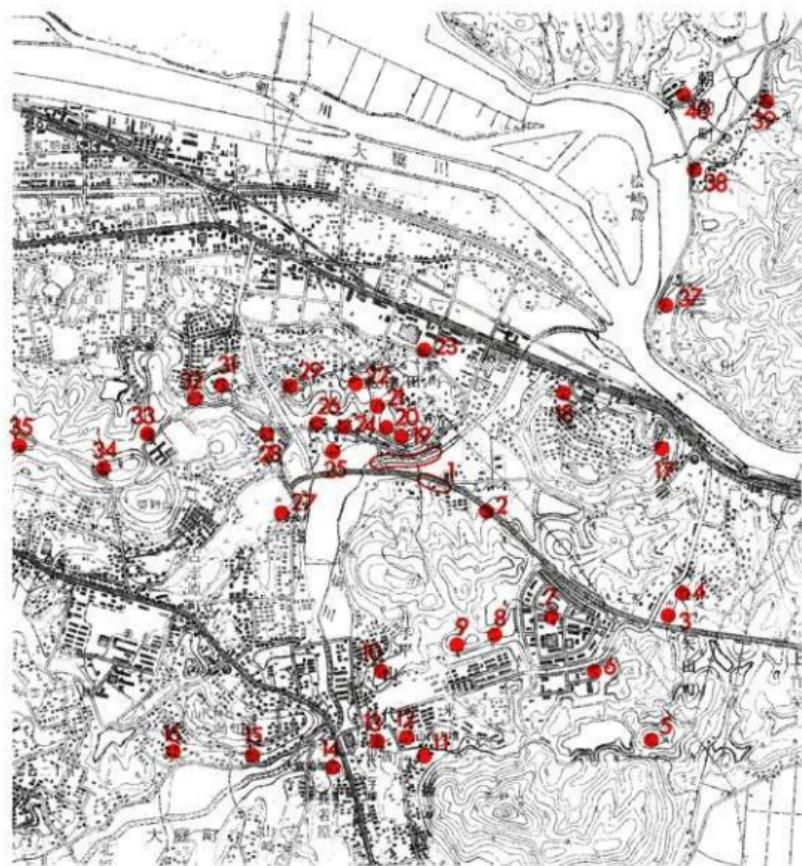
さて、各時代の遺跡について概観してみたい。

縄文時代の遺跡は少なく、石台遺跡と保地遺跡および意宇平野の法華寺前遺跡等が知られているに過ぎない。

弥生時代に入ると丘陵斜面や台地上に多くの集落跡が営まれていると考えられ、現在知られているものとしては、石台遺跡をはじめ、隣接する勝負遺跡や平所遺跡において堅穴住居跡が検出されている。また、墳墓をみると後期に属する四隅突出型の来美墳丘墓や間内越墳丘墓などが現れる。

古墳時代の集落としては、タルミⅣ遺跡、舟津田遺跡が点在し、古墳時代から奈良時代にかけて続くものである。一方、前期の古墳は現在のところ発見されていない。しかし、中期に入ると大橋川流域を中心とする丘陵上に、出雲地方を代表する大形古墳が多く出現する。代表的な古墳としては、茶臼山の西方山麓の大庭鷄塚（方墳、一辺約42m）、大橋川沿いの手間古墳（前方後円墳、全長約70m）、井ノ奥4号墳（前方後円墳、全長約57m）、石屋古墳（方墳、一辺40m）、竹矢岩船古墳（前方後方墳、全長47m）などが挙げられる。これらに続く後期古墳には茶臼山の山麓の山代二子塚（前方後方墳、全長92m）をはじめ意宇平野の岡田山古墳（前方後方墳、全長24m、横穴式石室）、大橋川沿いの朝酌岩屋古墳（横穴式石室）等多くのものが知られている。なお、築造時期は不明であるが、馬橋川流域にも室藤1号墳（前方後方墳、全長約20.5m）、高杉1号墳（前方後方墳、全長26.5m）、南家1号墳（前方後方墳、全長20m）をはじめ小規模な方墳が多く分布する。また、横穴墓も丘陵山腹に穿たれている。馬橋川流域に発掘調査が実施されたものとしては、十王免横穴群、狐谷横穴墓群、論田横穴墓群などがある。これらの横穴墓もやがて衰退し、この地域に展開した古墳文化も7世紀の後半には終焉をつげる。

次の律令時代に入ると、奈良時代の『出雲国風土記』によれば意宇平野周辺部には国府をはじめ意宇郡家、意宇軍團、黒田驛などの公的施設が置かれた。さらに、出雲国分寺や因分尼寺および来美庵寺等の私寺も建立されており、出雲国の政治、文化の中心地となっていましたのである。



第1図 石台遺跡と周辺の遺跡

- | | | | | |
|---------------|------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 石台遺跡 | 2. 勝負遺跡 | 3. 平所遺跡 | 4. 間内越墳丘墓 | 5. 田畠古墳 |
| 6. 十王兔横穴墓群 | 7. 来美增丘墓 | 8. 来美廐寺 | 9. 来美遺跡 | |
| 10. 井手平古墳群 | 11. 永久宅後古墳 | 12. 山代方墳 | 13. 山代二子塚 | |
| 14. 大庭鶏塚 | 15. 向山東古墳 | 16. 向山西古墳 | 17. 石屋古墳 | 18. 東光台古墳 |
| 19・20. 高杉古墳群 | 21. 伝兵衛山古墳 | 22. 伝兵衛山古墳 | 23. 鹿日神社前遺跡 | |
| 24. タルミⅠ遺跡 | 25. タルミⅢ遺跡 | 26. タルミⅣ遺跡 | 27. 古志原遺跡 | |
| 28. 嘘ヶ谷遺跡 | 29. 榎屋古墳 | 31. 岡古墳群 | 32. 岡横穴群 | |
| 33. 横田古墳群・横穴群 | 34. 室藤古墳群 | 35. 奥金見古墳群 | | |

II 調査に至る経緯

今回の石台遺跡の調査は、昭和55～56年に行った漸定道路部分の残り4車線の本道工部分についてである。

国道9号線松江東バイパスは、6車線が計画されており、昭和57年に行われた鳥根国体主要関連道路として供用するために、昭和55・56年の2ヶ年にわたって計7遺跡（春日遺跡、夫敷遺跡、布田遺跡、中竹矢遺跡、才ノ岬遺跡、勝負遺跡、石台遺跡）の調査を行った。

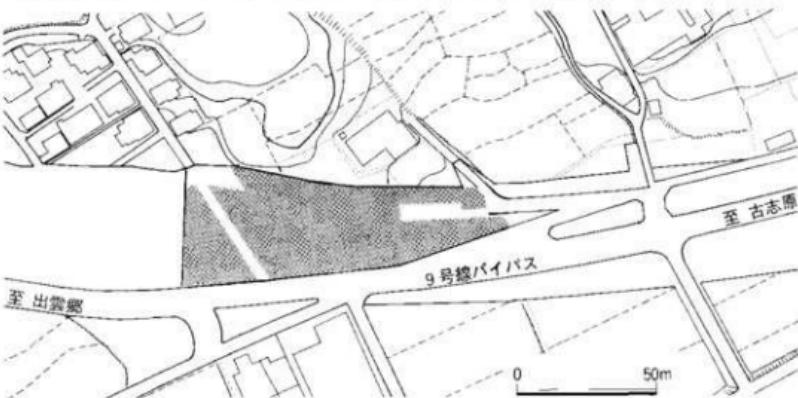
その後、60年度に建設省から国道9号線松江東バイパスの残り4車線の本道工部分の調査依頼があり、協議の結果、61年に春日遺跡から調査を行い、62年度に夫敷遺跡の調査を行った。

本年度は、本道工部分の調査に入り3年目であり、東バイパスルート内東側の布田遺跡と西端の石台遺跡の調査を行った。

III 調査の経過

今年度の調査は、前回の調査結果に基づいて調査区を設定した。I～IV調査区は、丘陵地の斜面となっており、前回の調査で遺構を検出した部分である。V区は丘陵谷部であり、前回の調査で遺物の包含層、遺構を検出している。

調査は、4月21日にV区の畠地の部分から着手した。地山面に黒褐色土が堆積しており、その中

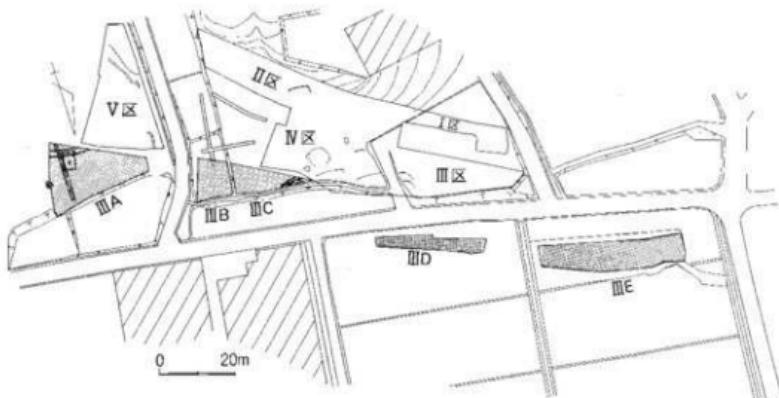


第2図 石台遺跡調査区配置図

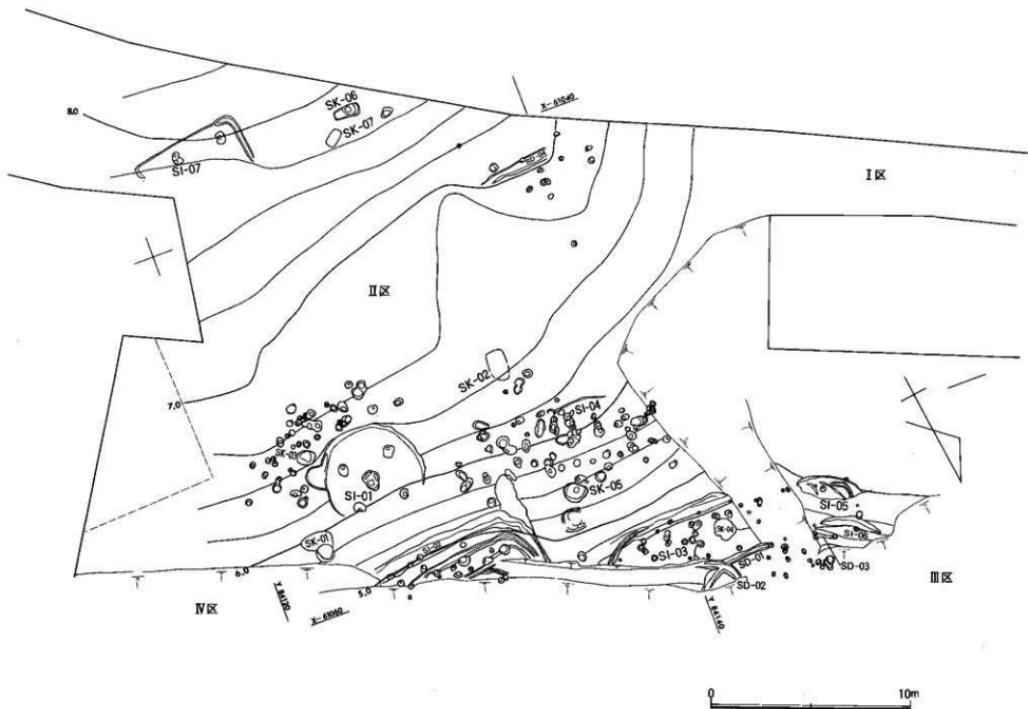
より弥生土器の破片が出土した。IV区の西側では、後世の重機掘削の痕跡が確認され、V区との境は宅地跡のため、かなり削平を受けている。5月24日に重機により、I・II区の客土の除去に入った。I区の西端は旧地形を残すものの大部分は宅地により削平を受けており遺構等は確認できなかつた。III区も客土を重機により除去したところ、I区に続く宅地跡となっており水平に削られていた。わずかにIV区との境に旧地形が残っており遺構を確認した。5月25日から、V区の客土を重機により除去。6月22日より調査に入る。南側より北側へ向けて傾斜しており、北側では谷が深く、包含層が厚く堆積していた。10月27日にこの部分の調査を終了する。I・II区とIII・IV区の間には仮設道路があり、II・IV区終了時に道を移動し、I・II区と合わせて調査した。II区は、畑の耕作のため地表面に大きな凹凸がみられたが、ピット、溝、土壤を検出した。11月8日にすべての調査を終了した。

IV 調査の概要

今回の調査で遺構が集中して検出されたのは第IV調査区である。低丘陵の先端に立地しており、標高7m以下の緩斜面に弥生時代の住居跡、ピット群がみられる。IV区の西側のIII区においても住居跡が検出されたが、大部分を宅地の造成により削られており遺構は残存していないかった。IV区の南側、丘陵尾根上においては、ピット群、溝状遺構、土壤が検出された。尾根上の平坦面であるが明確な住居跡は検出していない。丘陵の内側斜面にあたるI区ではピット群を検出している。V区は谷状の部分であり、弥生時代、平安時代の遺物が多く流入していた。



第3図 石台遺跡調査区全体図(網目は56年調査区)



第4図 石台造跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ区造構全体図

第Ⅰ調査区

第Ⅰ調査区は、今回調査を行った中で西端に位置しており、丘陵斜面が緩やかに東から西へ向け下っている。第Ⅰ調査区で遺構を検出したのは、 $6 \times 8\text{ m}$ の範囲であり、そこからピット26個を検出した。ピットは径15cm～40cmの小形のもので、平面形は円形、橢円形とさまざまである。深さも約20cmと浅いものが多く、建物の柱穴の並びは確認し得なかった。遺物は土器の細片が出土したのみである。

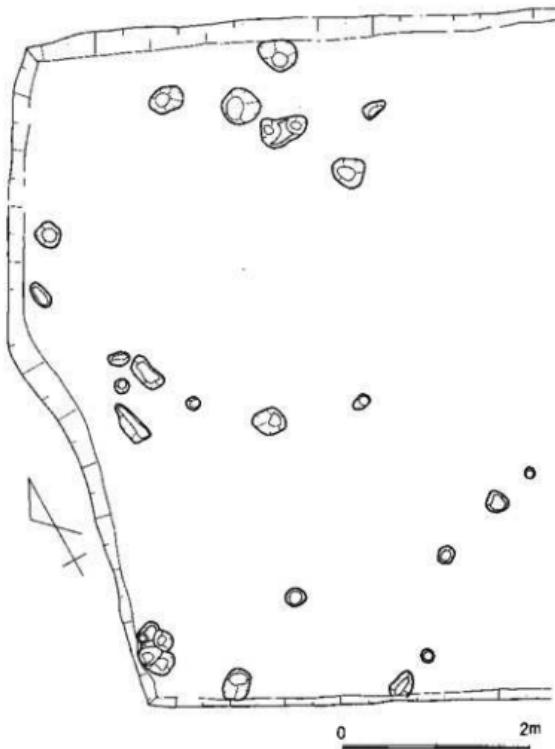
第Ⅱ調査区（第3図）

第Ⅱ調査区は、第Ⅳ調査区の北側に位置している。丘陵尾根上にあたり、標高6.0m～8.0mの間に遺構が存在している。調査区全面にわたって後世の耕作により削平を受けており、特に北側のⅣ区との間は地山上に遺物包含層がまったく残らず、幅50cmの溝状の凹みが続いてみられた。遺構が残っている部分は地山上に

20cmの赤褐色土が堆積していた。

SI-07（第6図）

第Ⅱ調査区の東側に位置する。緩傾斜の尾根上に「コ」字状に地山をカットし、平坦面を作り出している。地山上には黄褐色土が堆積していた。南側での高さは、25cmを測る。この平坦面の西側には、幅30cm、深さ8cmの溝が掘られていた。この平坦面の中には二つのピットが掘り込まれているが、P1は壁がかなり傾斜しており、底は極めて小さいものである。P2は径60cm深さ33cmを測る。この二つのピットの位置は平坦面の中でもやや西に寄つ

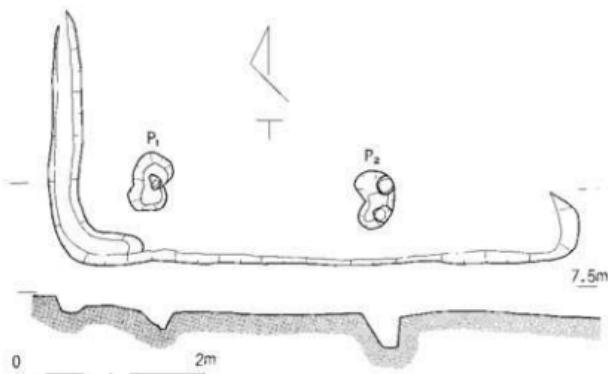


第5図 第Ⅰ調査区遺構全体図

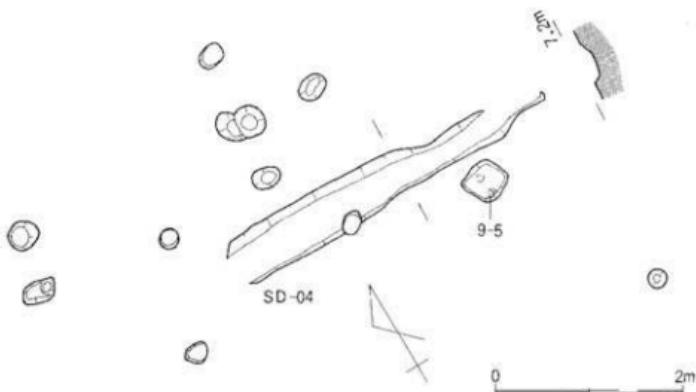
ており、P1が浅いものであることなどより建物跡とは考えにくいものである。この平坦面、ピット中よりは遺物は出土していない。

SD-04（第7図）

第II調査区の西側に位置している。溝は東西方向に主軸を持ち、幅60cm、深さ8cmを測る。溝の底はかなり平坦に削られていた。溝内からは遺物は出土していない。この溝の周囲からピットが検出されているが建物等の規格性は確認し得なかった。P10は正方形のプランを呈し、長さ44cm、深さ20cmを測る。この中より低脚杯（第9図5）が出土している。



第6図 第II調査区 SD-07実測図



第7図 第II調査区 SD-04他実測図

SK-06 (第8図)

第Ⅱ区の中央部に位置している。長方形を呈しており、長さ0.88m、幅0.5m、深さ20cmを測る。底面はほぼ平坦で、壁は垂直近く立ち上る。この土壙は主軸方向をN-60°-Eに持つ。壇内からは、土師器片2点(第9図1,2)、石が出土している。

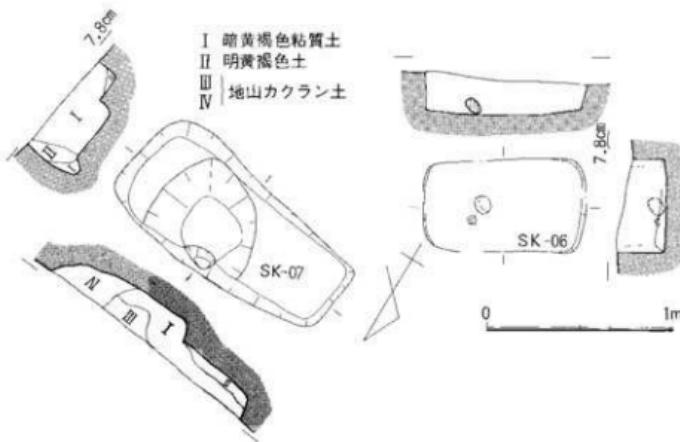
SK-07 (第8図)

SK-06の東側に隣接して位置しており、主軸はN-97°-Sとはほぼ東西方向を向いている。土壙の平面形は長方向を呈し、長さ1.3m、幅0.64m、深さ0.12mを測る。上壙のはば中央に後世の搅乱により椭円形の穴がみられ、この部分は深さ0.2mを測る。覆土中より土師器片2点(第9図3・4)が出土している。SK-06, 07の時期は、出土遺物より古墳時代中期と思われる。

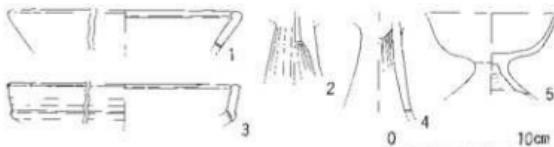
SK-06, 07 出土遺物

土師器 (第9図 1～5)

1, 3は壺形土器である。口縁端部がわずかに肥厚し、内外面ともナデで調整する。2, 4は高杯



第8図 第II調査区 SK-06,07実測図



第9図 第II調査区出土遺物実測図
(1.2: SK-06, 3.4: SK-07, 5: P-17)

形土器の脚部で、2の外面はタテ方向のヘラミガキが施される。内面はともにシボリメが認められる。5は低脚环形土器で、环部内外面、脚部外面はナデ、脚部内面はヘラケズリを施す。

第Ⅲ・Ⅳ調査区（第4図）

Ⅲ、Ⅳ区は、前回の調査で住居跡を検出したⅢ-C調査区の南側にあたる部分であり、丘陵が南から北へ向けて傾斜している部分である。斜面のやや上部にSI-01、04が位置しており、その周囲からは多数のピットが検出されている。SI-01の隣接地では、貯蔵穴と考えられるSK-01が位置する。SI-04の南側には土壤墓と思われるSK-02が位置する。このSK-02とSI-01の南側ピット群を境にして南側からは遺構が検出されなかった。丘陵斜面の先端部分では、SI-02、03、05、06が位置している。この中でSI-02は前回調査時に検出された竪穴住居状遺構に続くものと思われる。これらの住居跡は、斜面を加工し平坦面を作り出して住居としている。住居跡の北側は、バイパス建設前に市道となっていた部分であり、残存状況は極めて悪いものであった。

SI-01（第10図）

第Ⅲ調査区のはば中央の緩斜面に位置する。赤褐色土の地山に掘り込まれた、円形の住居跡であり、南側の壁は良く残存しているが、北側は斜面のために残存していなかった。覆土は、大部分に黒褐色土が流入しており、この中に炭化物と遺物が含まれている。住居跡の上縁の径5.2m、張り出し部分を含む長さ6.0mを測る。壁高は南側の一番残っている部分で40cmを測り、やや傾斜して立ち上る。東側の張り出し部分は、長さ1.0m、幅1.2m、深さ15cmを測り、入口状の部分と考えられる。

柱穴は、主柱穴が4本（P1～4）と浅いピット（P5）、中央ピットがある。主柱穴間の間隔はそれぞれ、2.3mである。ピットの上縁の径は40～70cm、深さ60～70cmを測る。ピットの覆土は、暗褐色土と地山ブロックの混土である。中央ピットは、平面形が不整形を呈している。長さ1.06m、幅0.9m、深さ30cmを測る。ピットの上方に3ヶ所のテラスを有し、底には小さいピット2穴が穿たれている。ピットの上部には黒褐色土（炭化物、土器片を含む）が、下部には暗褐色土（地山ブロックの混入）が入っている。このピット中より砥石9と河原石が出土している。

住居跡の床面はほぼ平坦であり、貼り床は確認できなかった。中央ピットの北側、西側の2ヶ所に焼土痕が確認された。大きさは、30×20cmと小さなものであり、焼け方もやや弱いと思われる。床面の周囲には、細長いピット状の落ち込みが連続して掘られており、一部分は周溝のようになっているが、大部分はそれぞれが独立している。周溝としては、壁材を立てるための用途があったものと思われる。

遺物は、大部分が覆土中から出土している。土器は、高環6が床面、ピット中より出土している。石斧8も床面より出土している。

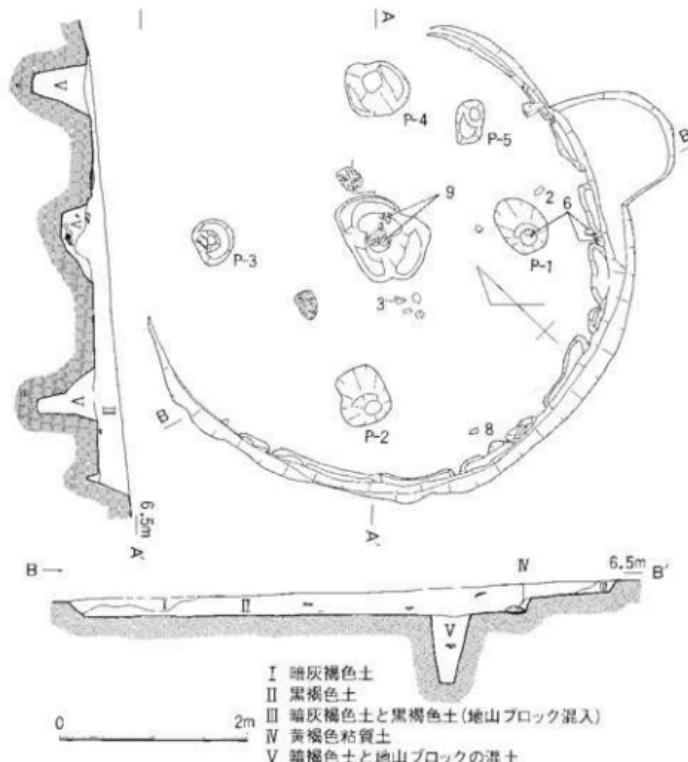
SI-01 出土遺物

甕形土器 (第12図 1, 2)

1は口縁端部が肥厚し、3条の沈線を回らす。肩部には、ハケメ原体によると考えられる連続刺突文をもつ。口縁部、外面胸部はヨコナデ、内面頸部以下はヘラケズリで調整する。2は、基本的に1と同様な施文、調整であるが、肩部に刺突文を持たず、外面がハケメ調整される点が1と異なる。

鉢形土器 (第12図 3, 4)

3は口縁端部が外方へ屈曲し、複合口縁状を呈す。端部外面に、2～3条のクシ状工具による沈線を巡らした後、口縁端部をヨコナデで調整する。胸部外面にはタテ方向のハケ、内面はヘラケズリを施す。4は口縁端部が肥厚するもので、頸部に小孔が穿たれる。口縁部～外面頸部はヨコナデ、外面胸部はヨコ方向のハケ、内面頸部以下ではヘラケズリで調整する。



第10図 第Ⅳ調査区 SI-01実測図

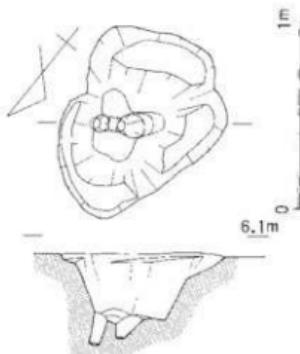
高环形土器（第12図 5, 6）

5は坏部がかなり深いものである。端部がわずかに肥厚し、2条のクシ描沈線を巡らしたのちヨコナデを施す。坏部は内外面ともヘラミガキで調整する。

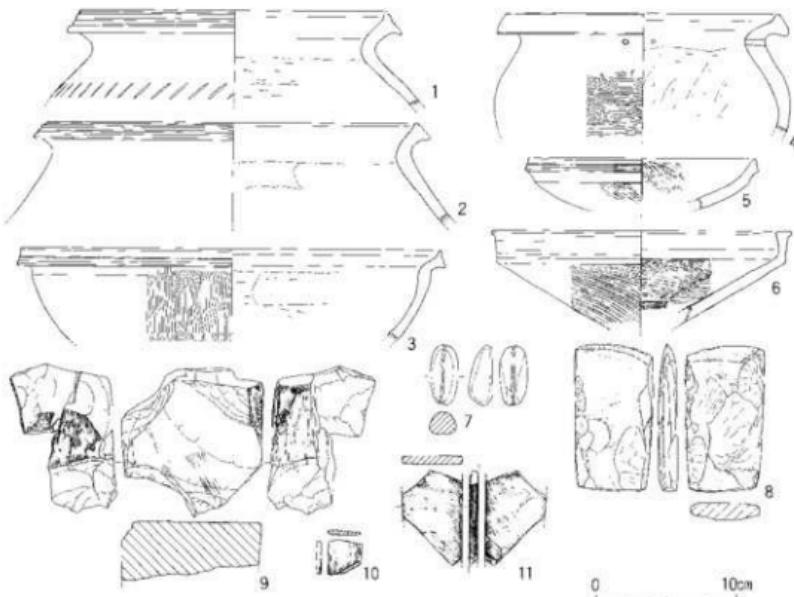
石製品（第12図 7～11）

7は石錘である。外面に浅い溝が彫り込まれる。8は扁平片刃石斧である。9は砥石で、かなり破損しているが、擦痕が認められる。10, 11は用途不明の石製品であり、一部に擦痕が確認できる。

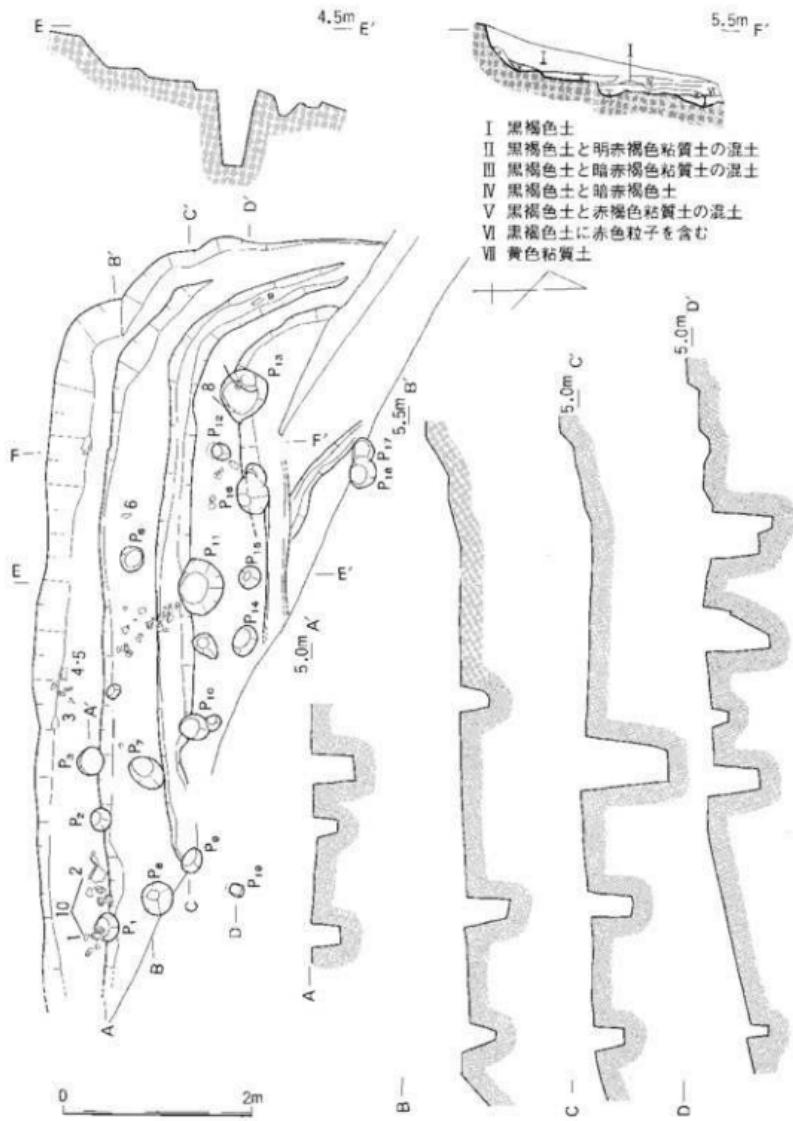
これらの土器は、覆土中出土の甕の内面頸部以下にヘケズリが施されており、SI-01の時期は弥生時代後期初頭と考えられるものであり、床面出土の高环も同時期の特徴である。



第11図 SI-01内中央ピット実測図



第12図 第IV調査区 SI-01出土遺物実測図



第13図 第Ⅳ調査区 SI-02実測図

SI-02 (第16図)

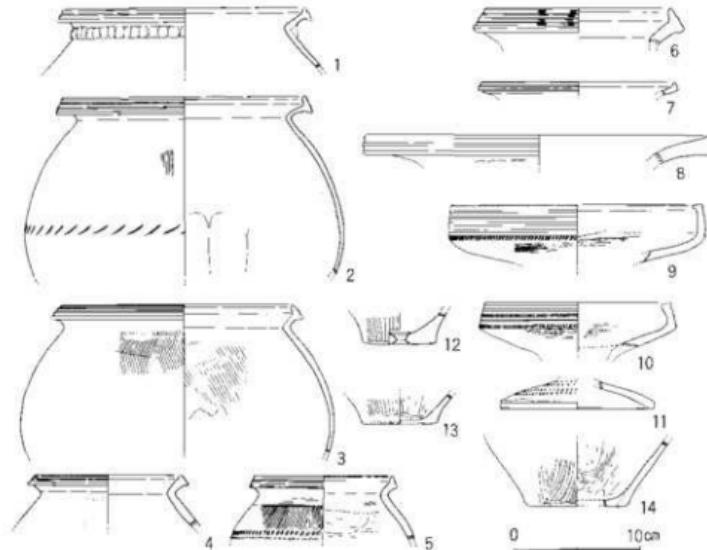
SI-01の北側斜面の黄褐色の地山を平坦に加工し、掘立柱建物を築いている。加工段の残存長約8.0m、幅3mを測る。前回調査の住居状遺構を合わせると約15mを測る。加工段は最低4回 [(A) ~ (D)] の建て替えがあったようで、平坦面も4段に削られている。加工段中の覆土は、大部分が黒褐色土であり、各床面上には、(B) 黒褐色土と赤褐色粘質土、(C) 黑褐色土に赤色粒子を含む土、(D) 黒褐色土が貼られている。建物の規模等は確認し得なかった。

各段上より弥生土器が出土しているが、それぞれに時期差は認められず、ほぼ同時期と考えられる弥生時代中期後葉である。

SI-02 出土遺物 弥生土器 (第14図、第15図)・壺形土器 (第14図 1~8)

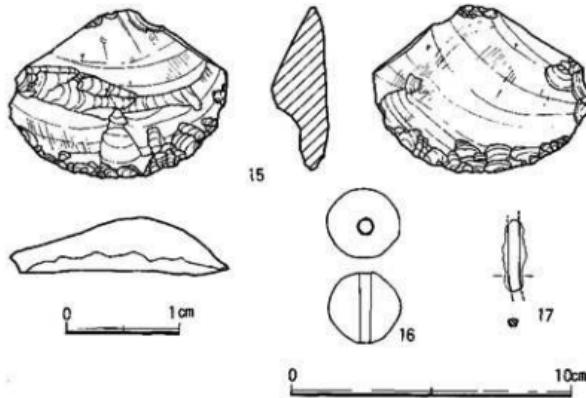
いずれも口縁部は「く」の字状に屈曲し、端部は肥厚、拡張してクシ状工具による2~4条の沈線を巡らす。1は頸部に貼付突審をもち、2は胴部最大径付近にハケメ原体による連続刺突文、5は肩部にクシ状工具による連続刺突文を施される。調整は、口縁部にヨコナデ、外面はナデまたはタテ方向のハケメと考えられる。内面はナデまたはハケメを施すが、2, 3は、胴部下半にヘラケズリ調整が認められ、5も頸部よりやや下がった付近までヘラケズリが施される。

壺形土器 (第14図 8)



第14図 第IV調査区SI-02出土遺物実測図(1)

口縁が朝顔形に大きく開き、頸部は若干肥厚して、2条の沈線が巡る。風化のため調整は不明確だが、外面の一部にタテ方向のハケメが確認できる。他はナデで調整すると考えられる。



高坏形土器（第14図 9, 10） 第15図 第IV調査区 SI-02出土遺物実測図(2)

杯部は屈曲し、直立またはやや内傾して立ち上り、頸部はやや肥厚する。外面にはクシ状工具による数条の沈線と、刻目文をもち、9は端部上面にも浅い沈線を施す。頸部はヨコナデ、杯部は外面ともヘラミガキ（9, 10の内面はハケメののち）で調整する。

脚 部（第14図 11）

高坏または器台形上器の脚部と考えられる。3本単位のクシ状工具による連続刺突文が3列巡り、外面～内面端部には朱が塗布される。内外面ともナデで丁寧に調整されている。

底 部（第14図 12～14）

12は、焼成後底部より穿孔する。調整は、いずれも外面はヘラミガキ、13はその後ナデ、内面は12は不明だが、他はヘラケズリを施す。

石製品他（第15図）

15は石製品で、黒曜石製である。16は土鍤、17は用途不明の鉄製品である。

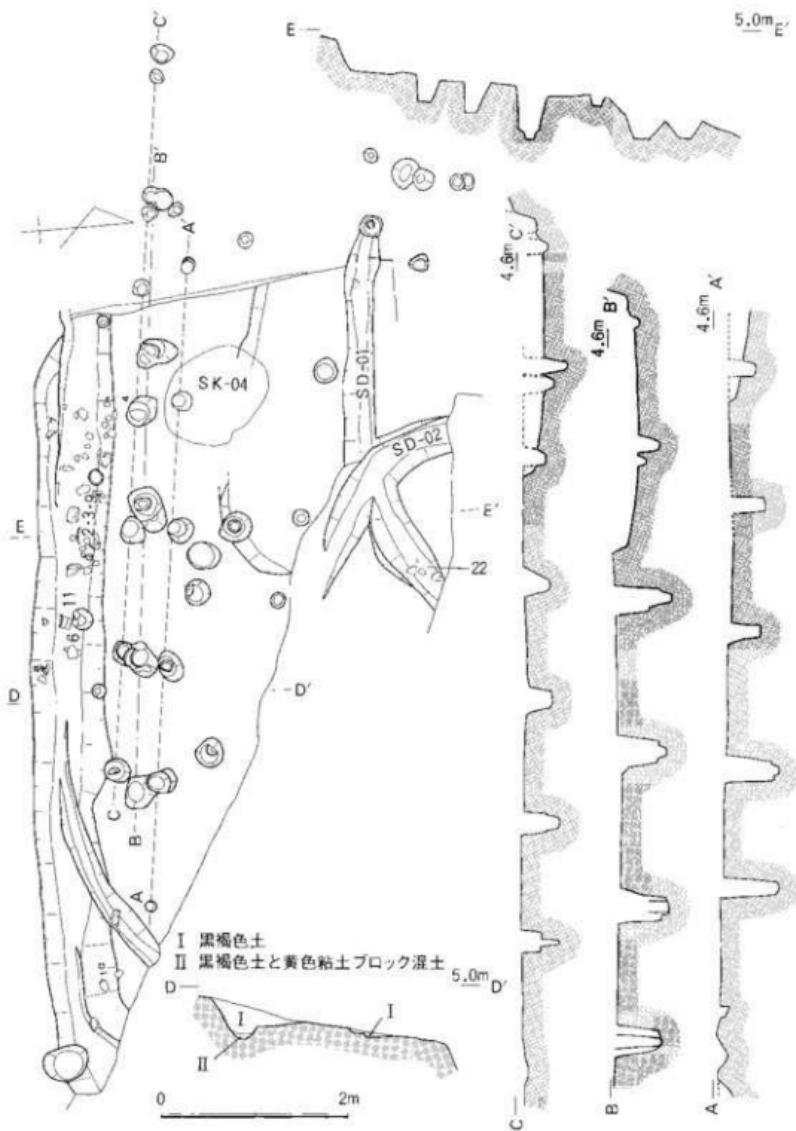
SI-03（第16図）

SI-02の西側に位置し、主軸方向は同一のものである。加工段の残存長8.3m、幅3.5mを測る。加工段は、黄色粘土に掘り込まれており、覆土は黒褐色土、黒褐色土に黄色ブロックの混入した土である。加工段の壁際には、幅60cmの溝が周っており、溝の底からの壁高は40cmを測る。

加工段中の柱穴の列では、桁行のみ確認している。北側からAラインで5間（7.0m）、Bラインで4間（8.0m）、Cラインで5間（7.7m）である。

この加工段中の北側の部分には、浅い段状の落ち込みがあり、加工段状のものと思われる。

SI-03の時期は、覆土中出土の遺物より弥生時代中期後葉である。



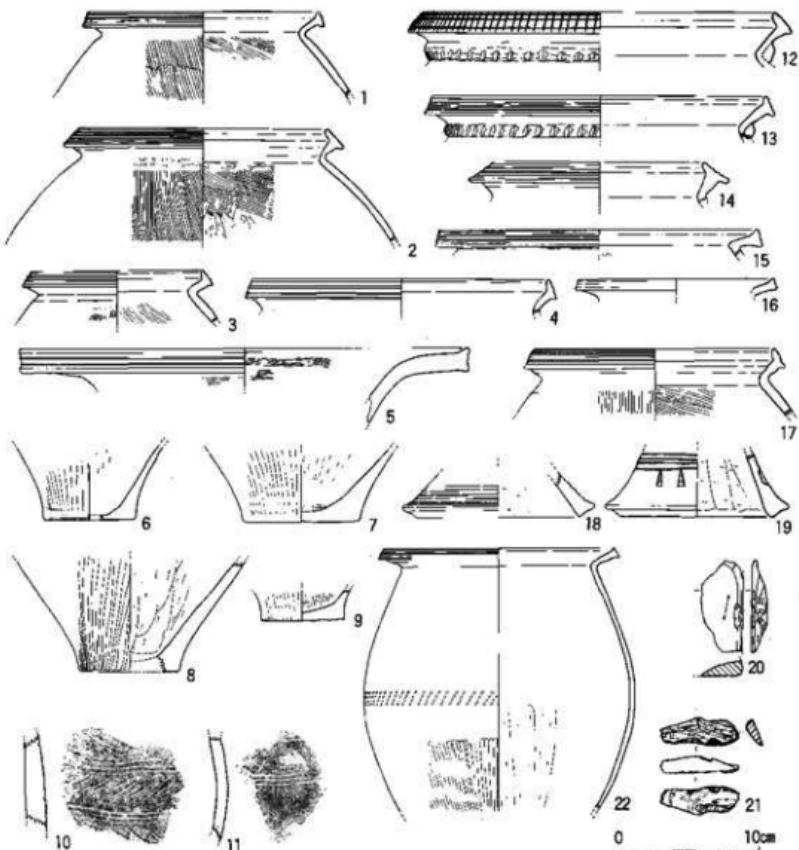
第16図 第Ⅳ調査区 SI-03実測図

SD-01 (第16区)

SI-03の北側に主軸方向と同じくして走る、幅35cmの溝である。東西に走る部分は同じレベルであるが、やや北へカーブするあたりから深くなっている。床面の高低差35cmを測る。溝内からは、弥生土器、甕（第17図22）が出土している。この甕の時期は、弥生時代中期後葉である。

SD-02 (第16区)

SD-01と切り合い関係にあり、SD-01（新）、SD-02（古）の新旧関係にある。この溝も北側部分が低くなっている。溝の幅50cmを測る。



第17図 第IV調査区SI-03出土遺物実測図(21はSD-01出土)

SI-03 出土遺物

弥生土器 (第17図 1~19)

菱形土器 (第17図 1~4, 12~17, 22)

いずれも、口縁は「く」の字状に屈曲し、端部は肥厚、拡張する。1~4は、端部が内傾し、クシ状工具により3~5条の沈線を巡らす。調整は、口縁部はヨコナデ、胴部は内外面ともタテ~ナメ方向のハケメを施すが、2の内面頸部よりやや下がった位置にタテ方向のヘラケズリが認められる。12, 13は、口縁部形態は前者と同様で、端部には3, 4条の平行沈線をもち、12にはタテ方向の刻目も加えられる。調整はともに内外面ヨコナデを施す。14, 15, 17も、拡張する口縁端部に3, 4条のクシ描沈線を巡らすものである。口縁部はヨコナデ、胴部はタテまたはナメ方向のハケメで調整する。16は、口縁端部がわずかに肥厚するが、外面に凹みをもつて沈線は認められない。内外面ともヨコナデで調整する。22は口縁端部がわずかに肥厚し2条の平行沈線を巡らす。

胴部最大径付近には4条以上のクシ状工具またはハケメ原体による連続刺突文を施す。胴部上半の調整は不明確で、下半部外面はタテ方向のヘラミガキ、内面はタテ方向のヘラケズリで調整する。

壺形土器 (第17図 5, 10, 11)

5は口縁が朝顔形に開き、端部は肥厚して外面に3本の凹線文、口縁部内面にも凹線文が入ると考えられる。調整は口縁端部はヨコナデ、他は外面がタテ方向、内面がヨコ方向のハケメである。10は胴部片である。ナメ方向の連続刺突文が列ごとに向きを変えて3列施され、各列の間に4本の浅い平行沈線が巡る。11も胴部片で、4, 5条のクシ状工具による平行沈線、波状文の組合せが2組以上確認できる。

脚 部 (第17図 18, 19)

18, 19は高杯形土器の脚部と考えられる。18は外面に5本の凹線文が巡るもので、19はヘラ描沈線を4本施し、その下方に三角形の陰刻をもつ。調整はともに外面~脚端部がヨコナデ、内面ヘラケズリ(18は後、ヨコナデ)である。

底 部 (第17図 6~9)

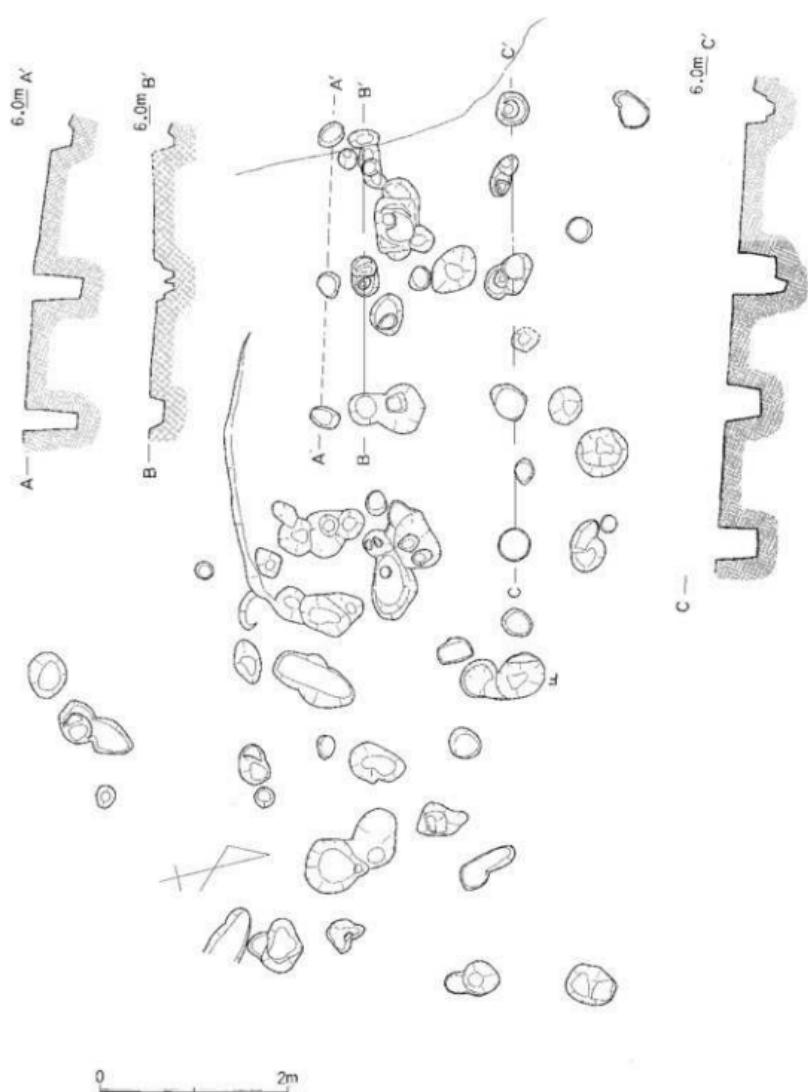
いずれも平底で、しっかりしたつくりである。調整は、底はナデ、外面はタテ方向のヘラミガキで底に近い部分はヨコナデを施すものである。内面はヘラケズリの後、ナデを施すが、7, 9は底に指頭圧痕が見られる。

石 器 (第17図 20, 21)

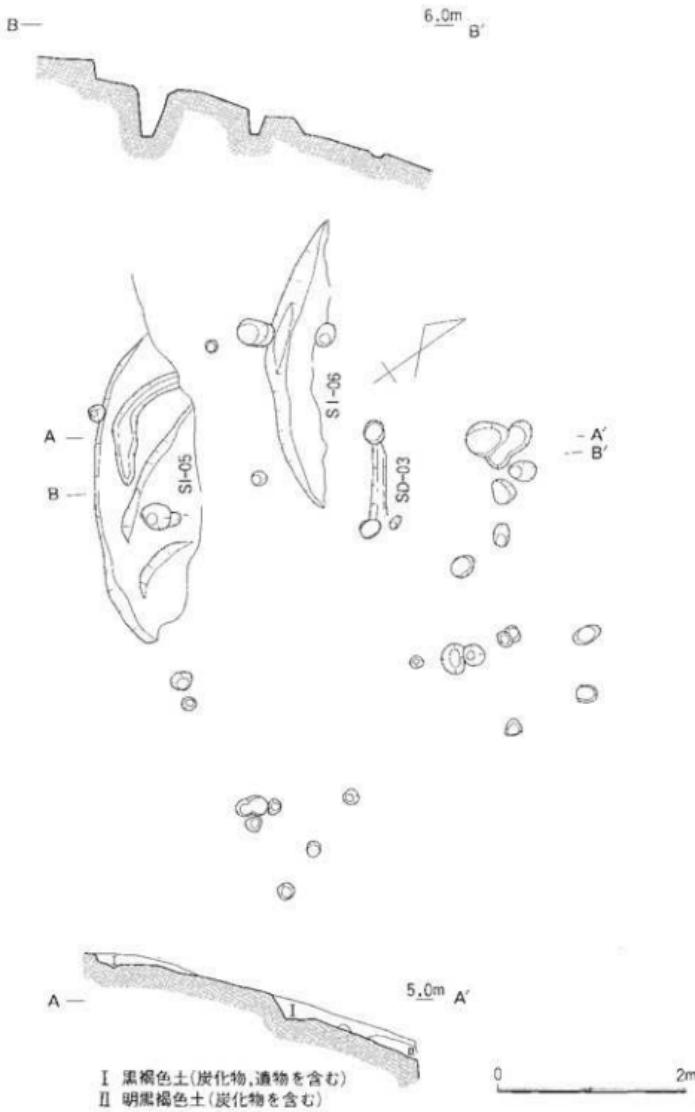
20は砥石で擦痕が確認できる。石材は不明である。21は用途不明の石製品である。

SI-04 (第18図)

SI-01の西側に位置する。加工段状の部分は、上部に削平を受けておりやや不明瞭であり、長さ3.0



第18図 第IV調査区 SI-04実測図



第19図 第IV調査区 SI-05, 06他実測図

mを測るのみである。その中で建物跡になると思われる柱穴の並びは3列あり、いずれも桁行のみを確認している。その他にも柱穴と思われるピットは多数検出しているが建物としてはとらえていない。Aは、2間で桁行3.3m、Bは2間で桁行3.48m、Cは、3間で桁行5.0mを測る。

これらの建物の時期は、出土土器が細片のために不明であるが、他の住居跡と同様のものと思われる。

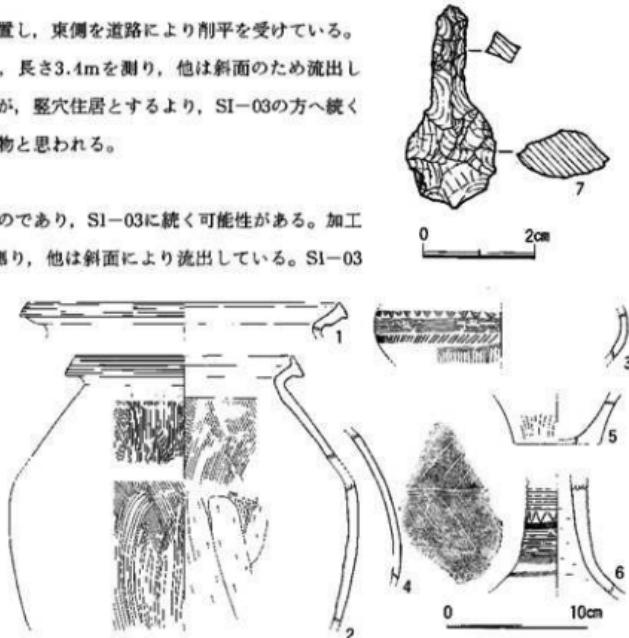
SI-05 (第19図)

SI-03の西側に位置し、東側を道路により削平を受けている。住居跡の掘り込みは、長さ3.4mを測り、他は斜面のため流出している。円形を呈するが、堅穴住居とするより、SI-03の方へ続く加工段中の掘立柱建物と思われる。

SI-06 (第19図)

SI-05と同様のものであり、SI-03に続く可能性がある。加工段の残存高3.2cmを測り、他は斜面により流出している。SI-03との間にピットが多数検出されているが、建物等は確認しなかった。

SI-05、06の時期は、出土した土器から中期後葉と考えられる。



SI-05, 06 出土遺物

第20図 第IV調査区 SI-05, 06出土遺物実測図

菱形土器 (第20図 1, 2)

口縁端部が拡張し、3条以上のクシ描沈線が巡る。調整は、口縁部をヨコナデ、胸部上半は外面ともハケメ、下半は外面をヘラミガキ、内面はヘラケズリである。

壺形土器 (第20図 3, 4)

3, 4とも胸部片である。3は6条のクシ描波状文、平行沈線文、連続刺突文で飾る。調整は外面にハケメのうちヘラミガキを施す。4は平行沈線、斜線文、貝殻腹縁による連続刺突文をもち、外面をハケメで調整する。

底部、脚部（第20図 5, 6）

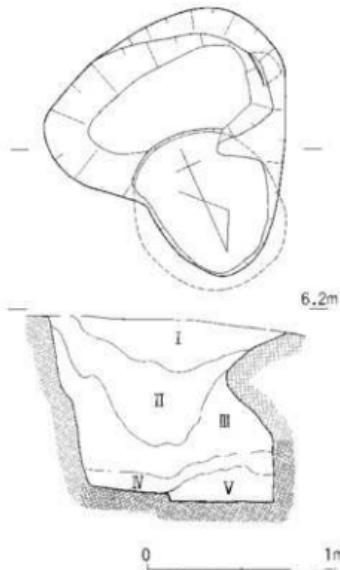
5は底部で、外面ヘラミガキで、内面はヘラケズリで調整すると考えられる。6は高环形土器の脚部で、外面は凹線文、ヘラ描波状文、ヘラ描平行沈線文、連続刺突文で飾る。内面はヘラケズリで調整する。

石 器（第23図）

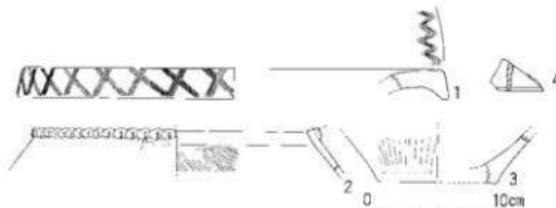
23図2は石錐である。石材は黒曜石を使用する。

SK-01（第21図）

SI-01の北東部に位置する土壙である。楕円形と円形の結合したような形態である。当初は両者に切り合い関係がある可能性もあったものの覆土の観察状況より一体のものと判断した。楕円形の部分は長さ1.3m、深さ0.9mを測り、底面はやや丸味をもっている。西壁の途中に長さ20cm、奥行12cmの小さな穴が開けられている。円形土壙の方は、深さ94cmを測り、直径86cmを測る。底面は極めて平坦に削られている。壁は、上部に向かうほど



第21図 第IV調査区 SK-01実測図



第22図 第IV調査区 SK-01出土遺物実測図(1)

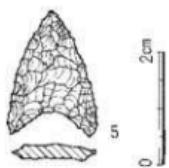
く張り出した形態となっており、当初は円形の部分は地山を天井として覆われていた可能性がある。この土壙の用途は貯蔵穴と考えられ、楕円形の部分から出入りし、円形の部分に物を貯えたと考えられる。

覆土中からは、弥生土器（22図1～3）、石器（22図4, 5）が出上している。この土壙の時期は出土した土器より弥生時代中期中葉と考えられる。

SI-01 出土遺物

弥生土器（第22図 1～3）

1は壺形土器の口縁部片である。口縁部が朝顔形に大きく外反し、端部は下方へ拡張される。端



第23図 (2)

部の外面には3条のクシ状工具による斜格子文、上面にも3条のクシ状工具により、やや雑な波状文を施す。調整は、風化のため不明である。2は甕形土器の頸部と考えられる破片である。屈曲部の外面に粘土紐を貼りつけ、指頭でおさえ、さらに凹部にヘラ状工具による刺突を加える。調整は、外面にわずかにタテ方向のハケメが見られる。内面は屈曲部付近がヨコナデ、以下はナナメ方向のハケメを施す。3は底部である。全

体に風化しているため調整は不明瞭であるが、外面の下部から底にかけてはナデ、外面上部はタテ方向のヘラミガキを施す。内面はナデであると考えられる。

石 器（第22図 4、第23図）

4は石鋸である。石材は結晶片岩を使用しており、刃の部分には使用痕が認められる。第23図は無基の石鎌である。石材は黒曜石を使用している。

SK-02（第24図）

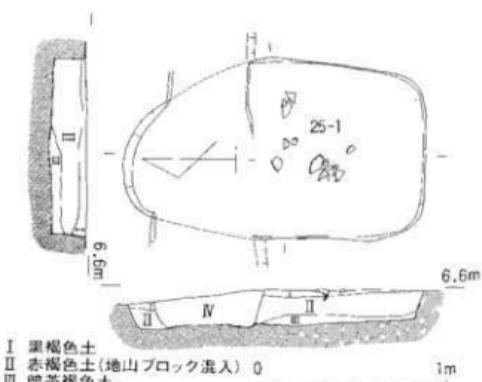
IV区の中央、南側に位置する土壙である。平面形は長方形のやや丸味を持つ形態である。主軸方向はほぼ北を向いている。長辺1.6m、短辺0.94m、深さ20cmを測り、壁はほぼ垂直近く立ち上る。赤褐色の地山に掘り込まれており、覆土は、黒褐色土、赤褐色土、暗茶褐色土が入っている。この土壙は中央部が削平されており、覆土の上部より弥生土器が出土している。

SK-02は、土壙墓の可能性があり、その時期は弥生時代中期中葉と考えられる。

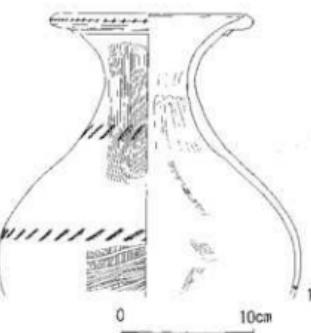
SK-02 出土遺物

弥生土器（第25図）

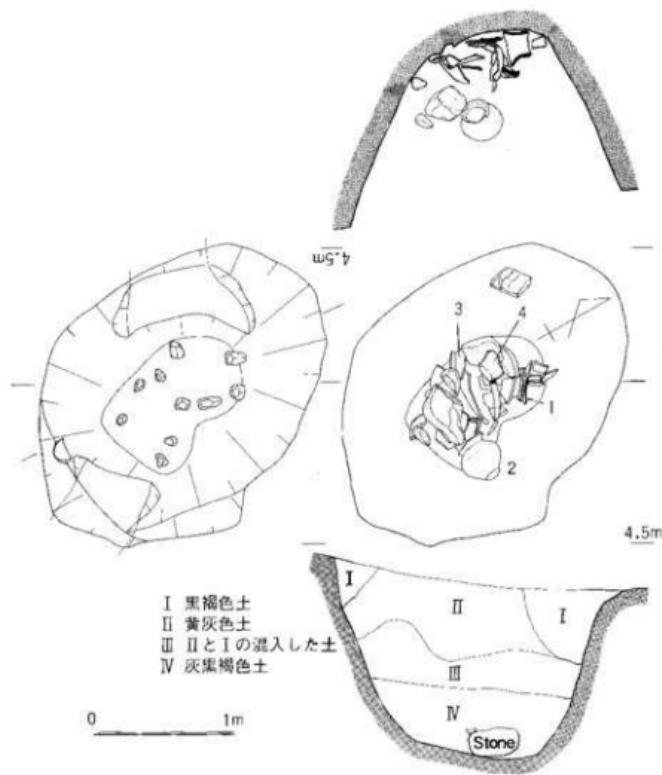
甕形土器の口縁部～胴部である。口縁部はゆるやかに外反し、端部は肥厚して丸味をもち連続刺突文が巡る。口縁端部直下に貼付突帯をもち、肩部と胴部最大径付近にハケメ原体による連続刺突文が施される。調整は、口縁部はヨコナデ、外面頸部～胴部はタテ方向のハケメで、肩部以下はさ



第24図 第IV調査区SK-02実測図



第25図 第IV調査区SK-02出土遺物実測図



第26図 第IV調査区SK-04実測図

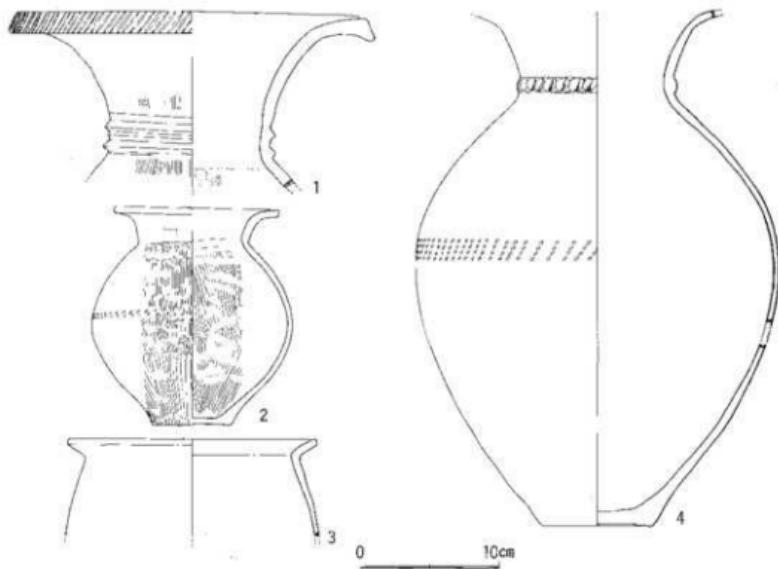
らにナデを施す。胴部下半はタテ方向のハケメののちヨコ方向のヘラミガキである。内面は、頭部は指頭によるナデ、胴部は細かいハケメ状のナデを施す。

SK-04 (第26図)

SI-03の中に含まれた場所に位置している。梢円形を呈す土壙であり、長辺2.24m、短辺1.7m、深さ1.4mを測る。土壙の壁には2ヶ所横穴が掘られており、SK-01の構造にも類似している。底面には径10cmの小穴が10個あけられていた。

覆土は、上から黒褐色土、黄灰色土、灰黒褐色土の順で堆積しており、下半分には、弥生土器の壺3、甕1と石が入っている。

この土壙の用途は、不明である。土壙の時期は、弥生時代中期中葉と考えられる。



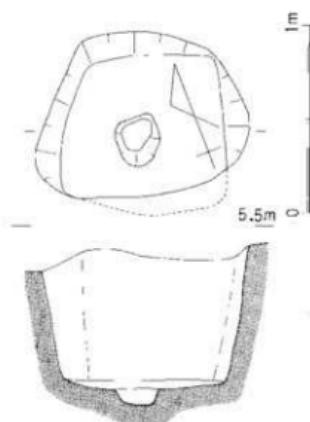
第27図 第Ⅳ調査区SK-04出土遺物実測図

SK-04 出土遺物

弥生土器（第27図）

1は壺形上器である。口縁は大きく外反し、端部は下方へ突出する。外面には刺突文が確認できる。頸部には、断面三角形の貼付突帯を2本もつ。調整は、貼付突帯の部分はヨコナデ、頸部の他の部分と肩部はタテ方向のハケメで調整する。内面は頸部直下に指頭圧痕、ハケメがかすかに残る。

2は壺形上器の完成品である。頸部が短く器形としては壺形上器に近い。口縁は短く外反し、端部は肥厚せず文様も施されない。胴部最大径付近には、クシ状工具による2条の連続刺突文が巡る。調整は、口縁部～頸部はヨコナデであるが、頸部外面には部分的にタテ方向のハケメが見られる。胴部外面上には、最大径よりやや下位まで細かいタテ方向のハケメを施し、以下はタテ方向のヘラミガキで調



第28図 第Ⅳ調査区SK-05実測図

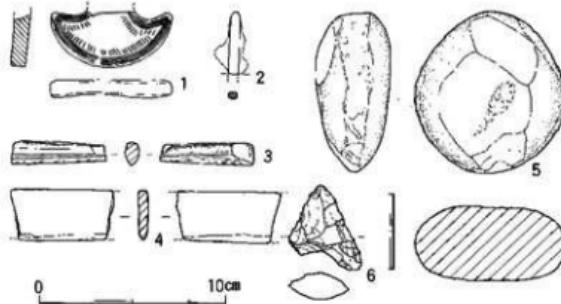
整する。底はヘラミガキあるいはナデで調整する。胴部内面は、全体に粗いタテ方向のハケメを施す。なお、胸部に孔があり、人為的にあけられた可能性もある。

3は甕形土器である。口縁は「く」の字状に屈曲し、端部は全体的にわずかに肥厚して、かすかな面をもつが、文様は施されない。全体に風化が著しく、調整は不明であるが、内面頸部以下はナデで調整すると考えられる。

4は壺形土器である。朝顔形に大きく外反する口縁をもつものであろう。頸部に貼付压模突帯をもち、胸部最大径付近に、4条のクシ描連續刺突文を巡らす。全体に風化が著しく、調整は不明である。

SX-05 (第28図)

SI-03の南側に位置する土壤で黒褐色土の地山に掘り込まれている。十



第29図 第IV調査区SX-01他出土遺物実測図
(1.2.6:SK-01,3:P-71)

m、深さ0.76mを測る。壁は垂直近く立ち上り、床面もほぼ平坦である。床面の中央には24cm×26cm、深さ8cmのピットが掘り込まれている。土壤中には、茶色土の覆土が入り込み、遺物は出土していない。土壤中の覆土も他の遺構に見られないもので、時期的に古いものの可能性がある。

SX-01 (図版)

SI-02の南西コーナーに切り合って位置する。溝状のプランを呈すが、遺構中の覆土は黒色土で、床面は浅く凹む程度のものである。この中から分銅形土製品の破片が出上している。

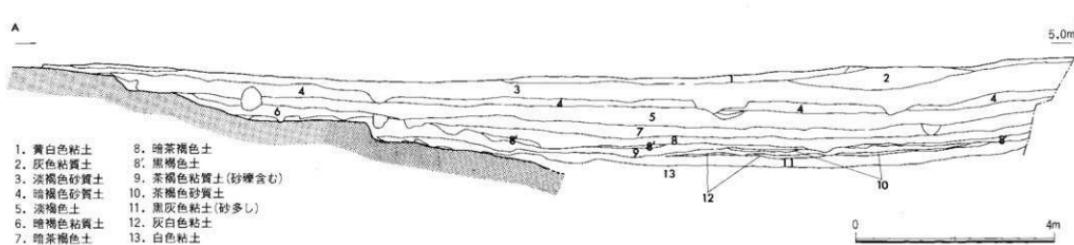
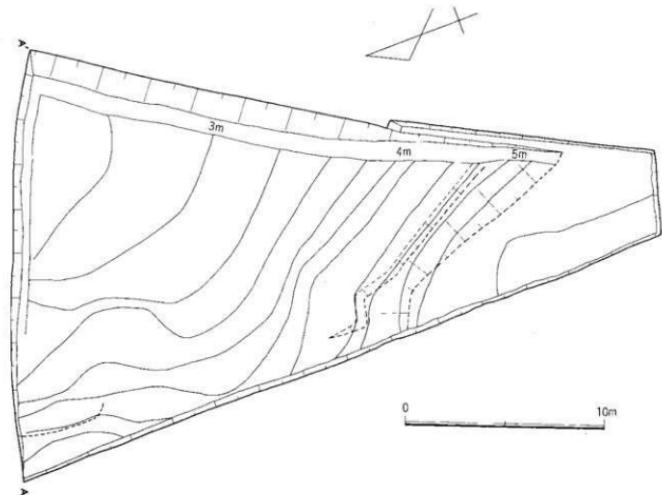
SX-01 他出土遺物 (第27図)

1は分銅形土製品で、片面表側にはクシ描連續刺突文をもち、周囲にハケメ状の浅い平行沈線が巡る。全体に赤色顔料を塗布する。2は用途不明の鉄製品である。3,4は右鏡で、石材は不明である。5は磨石で、擦痕、敲打痕が残る。6は無茎の石鎧で、サスカイト系の石材を使用する。

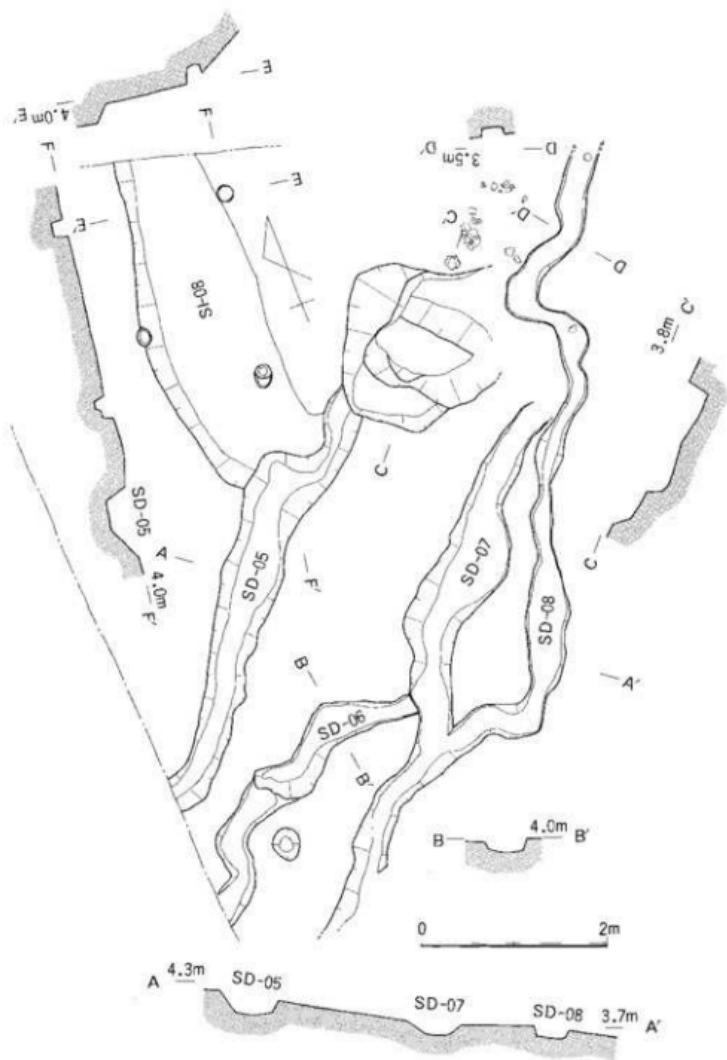
第V調査区 (第30, 31図)

この調査区は、今回の調査区中最も東に位置している。V区は、大部分が谷状の部分であり、南側は丘陵地となっており、耕作下土が地山である。

土層堆積状況を北壁でみると基盤層である白色粘土層上に2mの上が堆積している。1~3層は平安時代以降の建物を含んでおり、5~11層が弥生時代の遺物を含んでいる。13層の上面からは楓



第30図 第V調査区全体図、北壁 土層図



第31図 第V調査区SI-08他実測図

文土器の破片が出土している。5～11層中に含まれる弥生土器は、Ⅳ区でみられる遺構から流入したものと考えられる。遺物は、調査区中央東側から北側にかけて最も多く出土している。

SI-08 (第31図)

竪穴住居状の遺構の西側の壁のみ確認しており残存長3.8m、壁高20cmを測る。ピットは3穴確認しており、東側の2つの間隔は2mを測る。明瞭な遺物が出土しておらず時期は不明である。

SD-05 (第31図)

SI-08と切り合って南西から北東方向に延びる溝であり、南西の部分の方が高いものである。覆土は暗褐色土であり遺物は出土していない。

SD-06 (第31図)

SD-05に平行しており、覆土は暗褐色土で、遺物は出土していない。

SD-07 (第31図)

SD-06と一部切り合っており、途中で分かれSD-08となっている。

以上の溝は、時期的に新しいものと思われる。

第V調査区 出土遺物

縄文土器 (第32図 1～7)

下層より少量出土しているが細片が多く、全体を窺いうるものはない。1は口縁部で、内面はナデ、外面は条痕のちナデと考えられる。3は体部片で、内面は横方向のケズリ、外面は粗いナデ調整を施されている。4, 5は胎土焼成等から同一個体と考えられるので、体部内面はケズリ、あるいは板状工具によるナデ、外面は斜方向の粗いナデ調整が認められる。底部は厚い平底を呈し、内面はナデである。6, 7も同一個体と考えられ、平底で、体部内面はナデ、外面は条痕のちナデである。2は口縁部片で小さな突起をもち、外面に幅広の沈線文をもつが、風化著しく、調整は不明である。

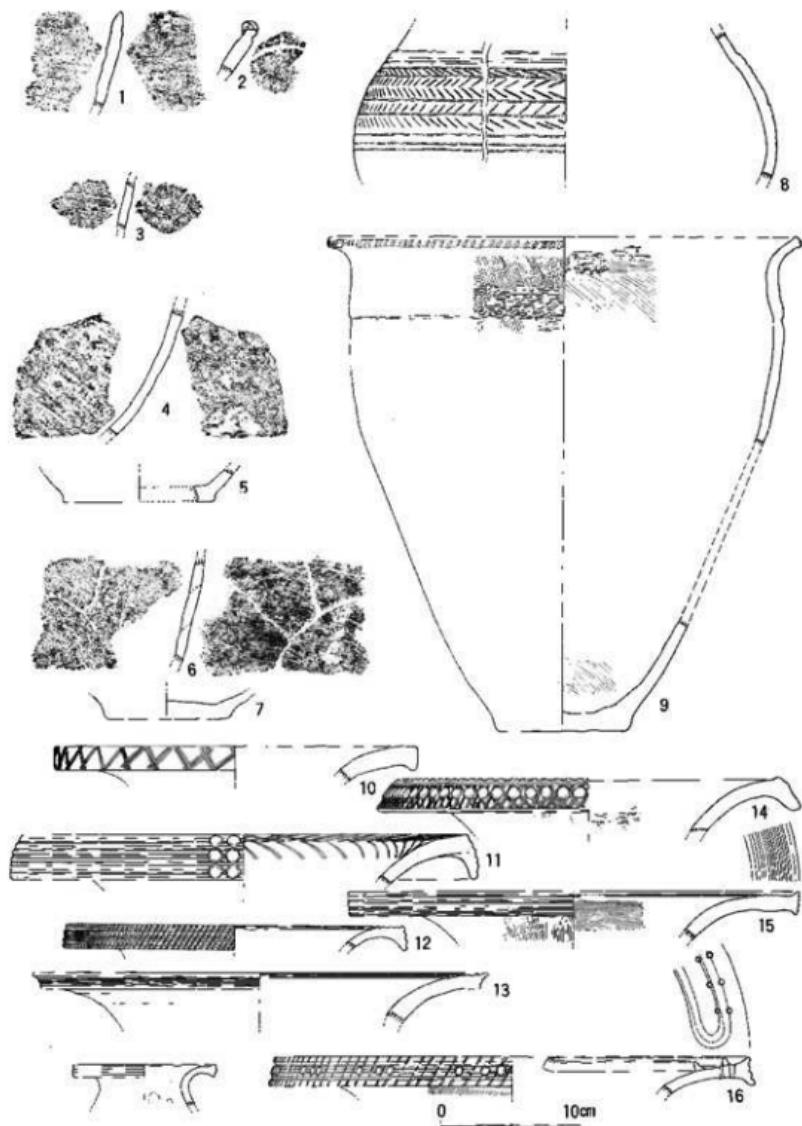
弥生土器 第5～11層にかけて石器とともに出土している。

前期の土器 (第32図 8, 9)

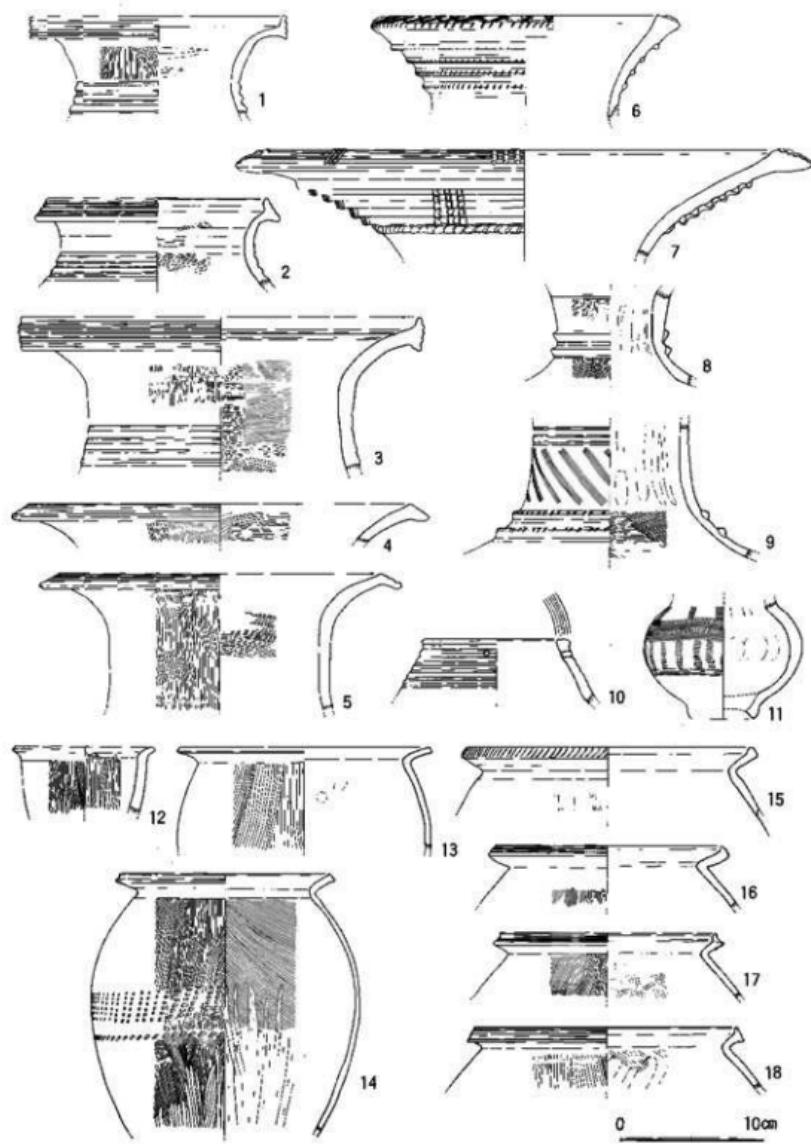
8は胴部片で、風化が著しいが、二枚貝腹縁による刺突文で飾っている。また頸部との境は帯状に造り出しており特徴的である。9は口径30cm以上の大形の甕で、口縁端部を平坦に造り、その下端に刻目を入れており、外面の段と合わせて特徴となっている。また口縁部外面にススが、底部付近の内面に炭化物が付着している。

中期の土器

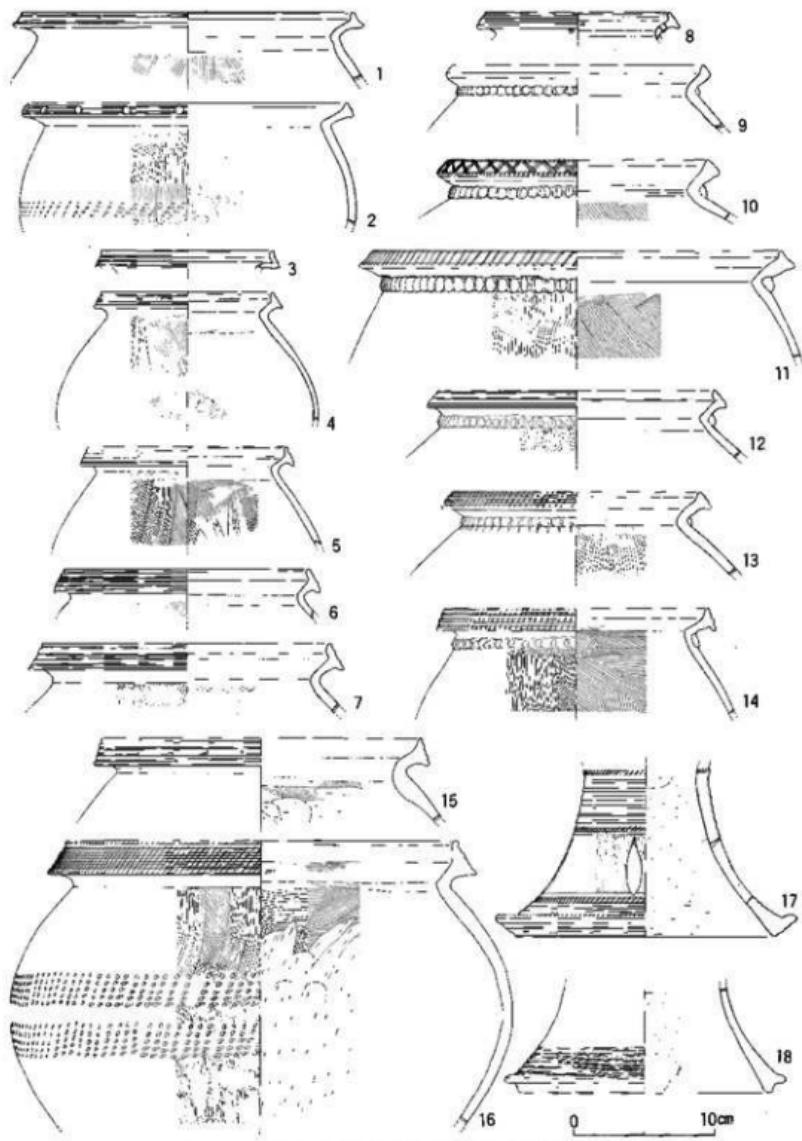
出土した土器のはほとんどがこの時期のものである。なお混乱をさけるため、分類は前回の報告書に準じて行うこととした。



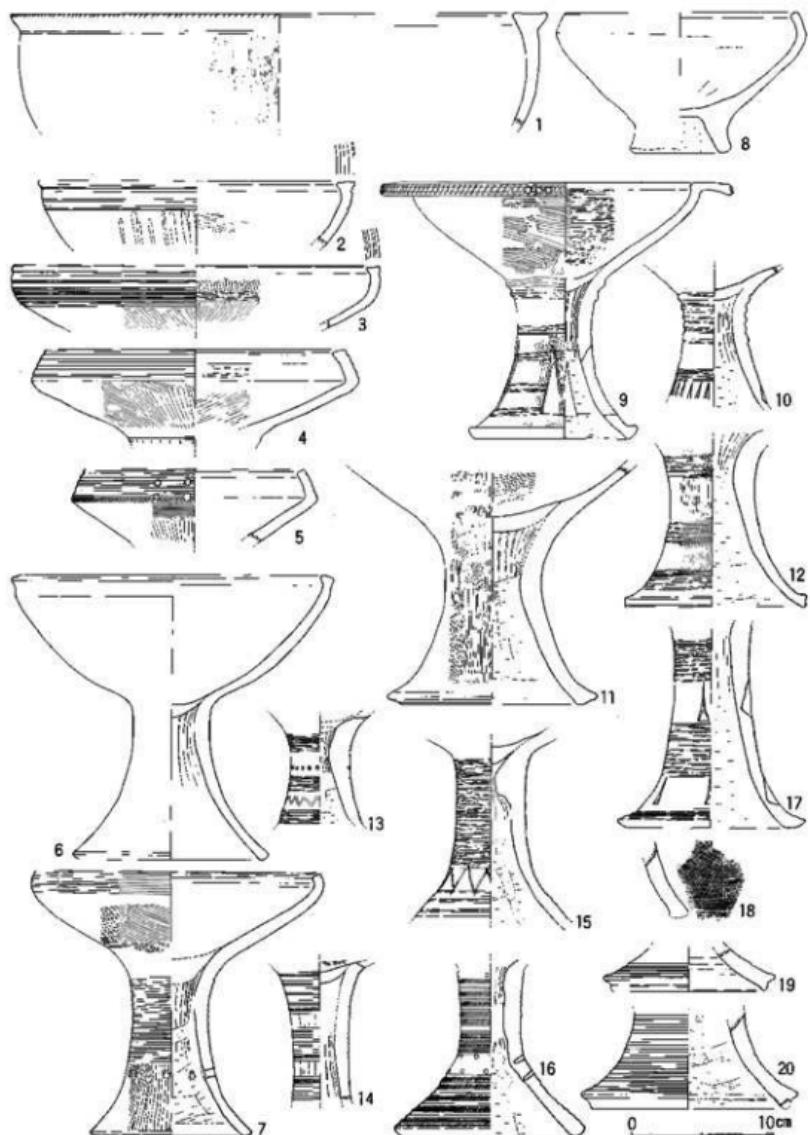
第32図 第V調査区出土遺物(縄文土器、弥生土器)実測図



第33図 石台遺跡出土遺物(弥生土器)実測図



第34図 第V調査区出土遺物(弥生土器)実測図



第35図 第V調査区出土遺物(弥生土器)実測図

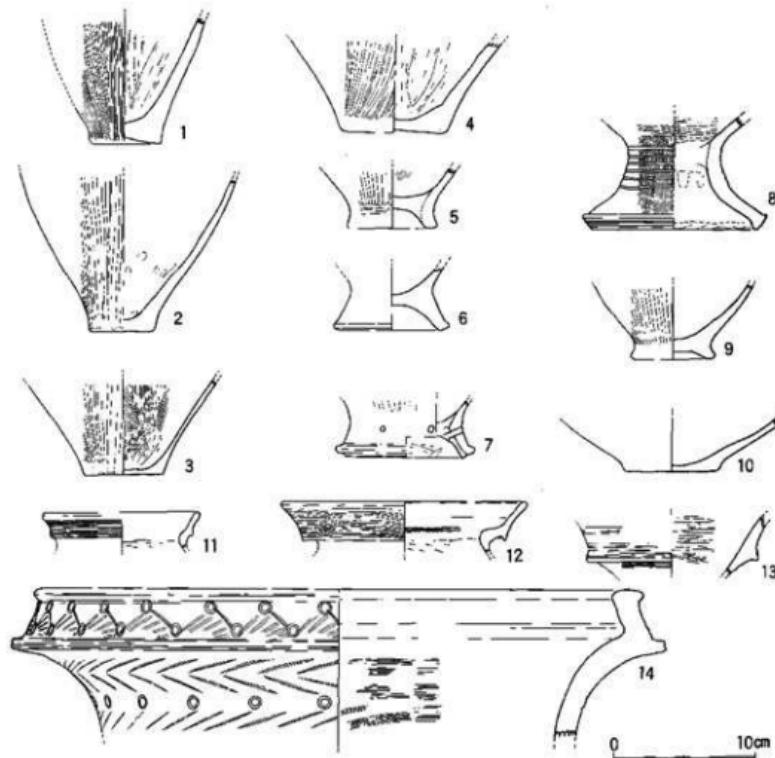
壺形土器（第32図 10～16, 第33図 1～11）

壺 B（第32図 10, 14） 朝顔状に大きく開く口縁で、端部を下方に拡張し平坦面を文様帶とするものである。14は口縁上面に指頭圧痕をもつ突帯を、端部に円形浮文を巡らせている。

壺 C（第33図 6） 漏斗状に開く口縁で、頸部から口縁部にかけ、外面に断面三角形の貼り付け突帯をもつ。

壺 D（第32図 12～17, 第33図 1～5） 形態的には壺Bに近いが、口縁端部を上方にも拡大し、口縁あるいは口縁上面に凹線文を巡らす。ただ口縁端を上方に長く伸ばすもの（第33図1～3）は凹線文のみで、刻目、円形浮文をもたないようである。

壺 E（第33図 10） 無頸で、口縁外面、端部に凹線文をもつ。ヒモ通しと考えられる小孔も認められる。



第36図 第V調査区出土遺物(弥生土器, 土師器)実測図

壺 F (第33図 7) 形態的には壺Cの口縁をより大きく開いたもので、端部に凹線文をもつ。口縁外面に6本の貼り付け突帯と1本の指頭圧痕帯を巡らす。

この他頸部片が2点(第33図8, 9)あるが、内方とも肩部との境に突帯を巡らし、頸部外面に凹線文をもつ。壺Dに対応すると考えられる。11は小形の壺で口縁を欠損する。外面に細かい刺突文を施し、底部は高台状となる。

壺形土器

多数出土しており、ここでは細かい分類をさけ、全体の特徴、傾向を見るにとどめておく。まず胴部の張りは第33図13, 14, 15、第34図2, 11を除き、口縁部径を大きく上まわる。口縁端はいずれも平坦(第33図13, 15、第34図9, 10, 11)あるいは、拡張して凹線文を巡らす。上方に引き伸ばしてくり上げ口縁とするものが多い。頸部外面に指頭圧痕帯をもつものは大形品が多く、かつ外面にスヌが付着するものは少ない。調整は、内外面ともハケメを主とするが、下半は縱方向のヘラケズリを多用していると考えられる。

器台形土器(第34図 17, 18)

外反しながら開く脚部で、高杯の脚としては大形のため器台形とした。いずれも外面に凹線文をもち、17はレンズ形の透しを4方向にもち、脚端にも凹線文を巡らす。

高環形土器(第35図 3~19)

大きく3分類が可能である。

高環A (7) 凹線文を持たないもので、口縁端を内側に突出し、脚内面は削らない。

高環B (3~6, 8) 高環Aに比して杯部が浅く、口縁部は内湾して立ち上がるか、屈曲して内傾するもの。口縁外面、端部に凹線文を巡らし、杯部内外面ともハケメ後ハラミガキを施す。脚部は長い筒部をもち凹線文、沈線文を多用するもの12~14, 17と、筒部がゆるやかに脚部に移行するものがある。内面はヘラケズリ調整である。

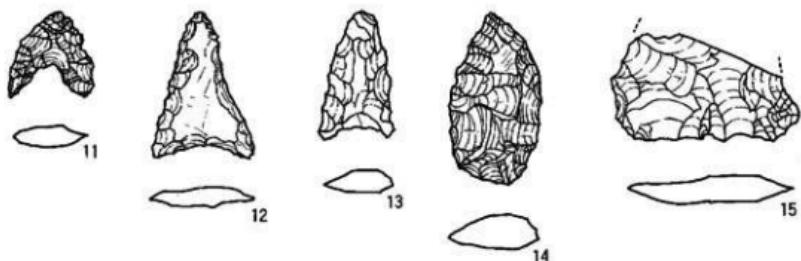
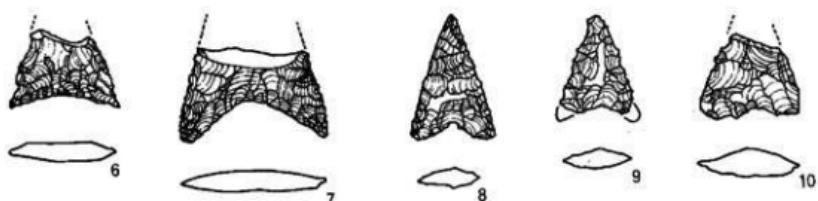
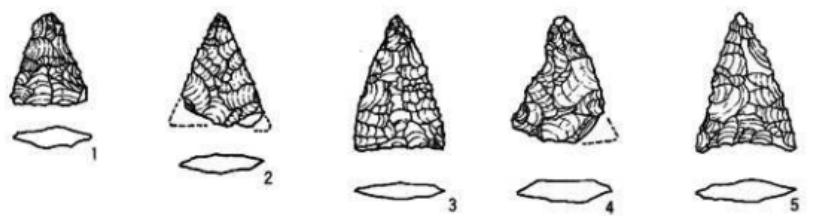
この他高環Bと同じ形態の杯部をもつ短脚の高杯2であるが、文様をもたない。

高環C (9) 口縁部が外方へ水平に折れ、杯部と脚部の境に突帯を2条巡らす。4方向に三角形の透しを入れている。

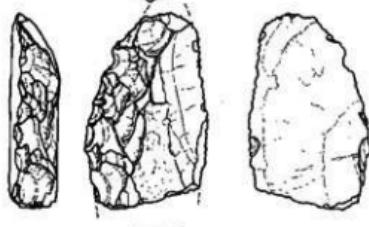
底部も多数出土している。(1)は内外面ともハケメ、他は外面が縱方向のヘラミガキ、内面がナデ、ヘラケズリの後ハケメを施している。また高台状を呈するもの多く、その外面に沈線文を巡らすもの8もある。なお9, 10は内外面に黒色の漆が残る。

後期の土器(第34図 15, 第36図 11~13)

15は16に形態的には近いが、内面のケズリが横方向で頸部まで届いており、ここでは後期のものとした。11, 12と13はいわゆる九重式に属すると考えられる壺、器台で、13の外面は赤色顔料が認

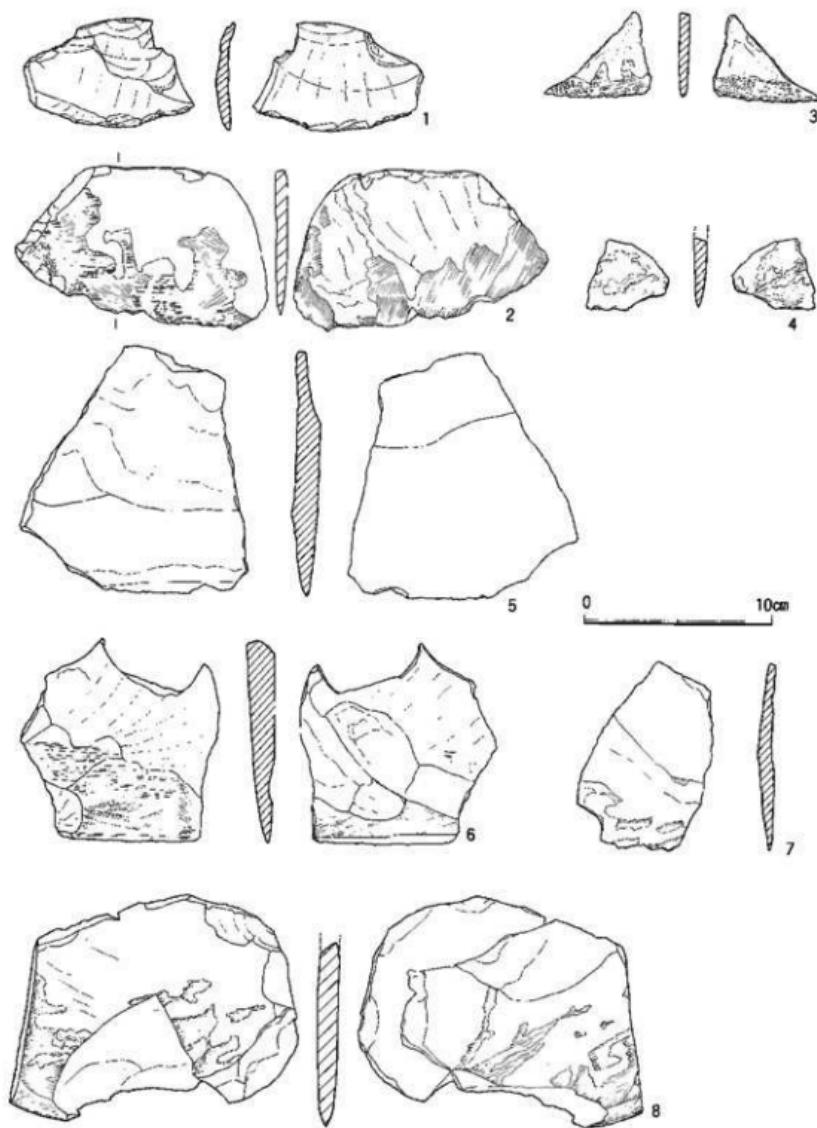


0 5cm

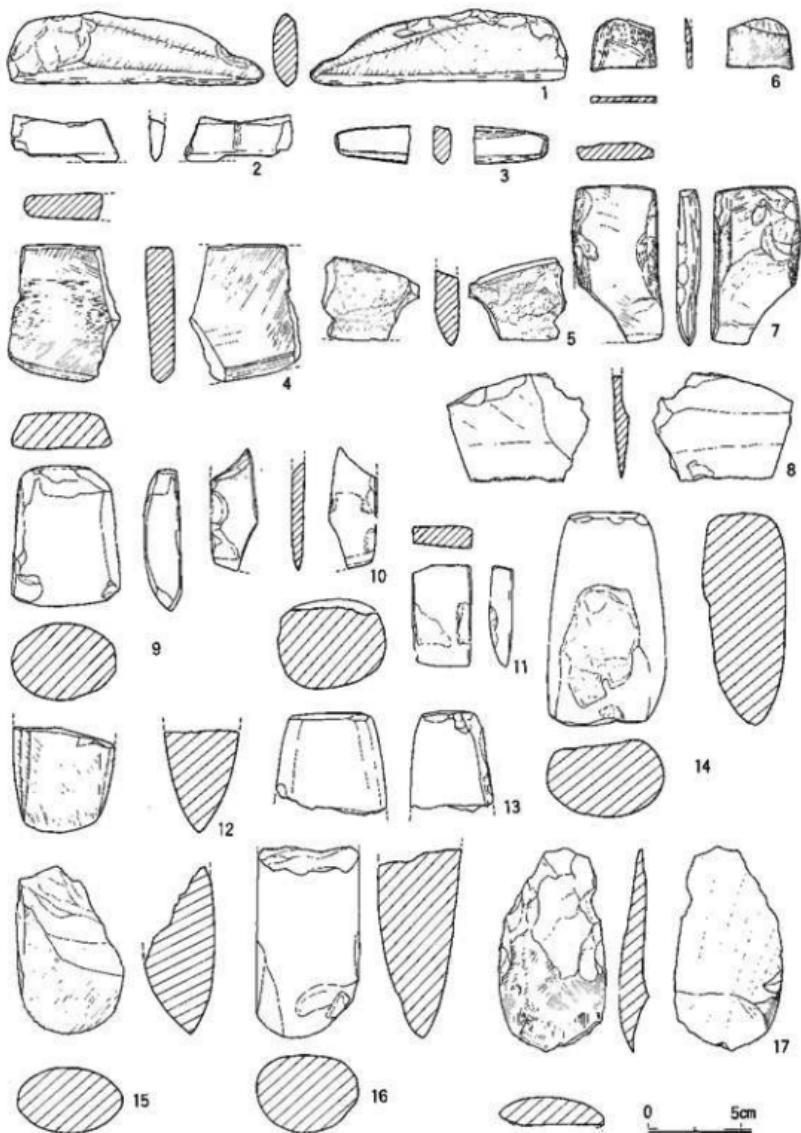


0 5cm

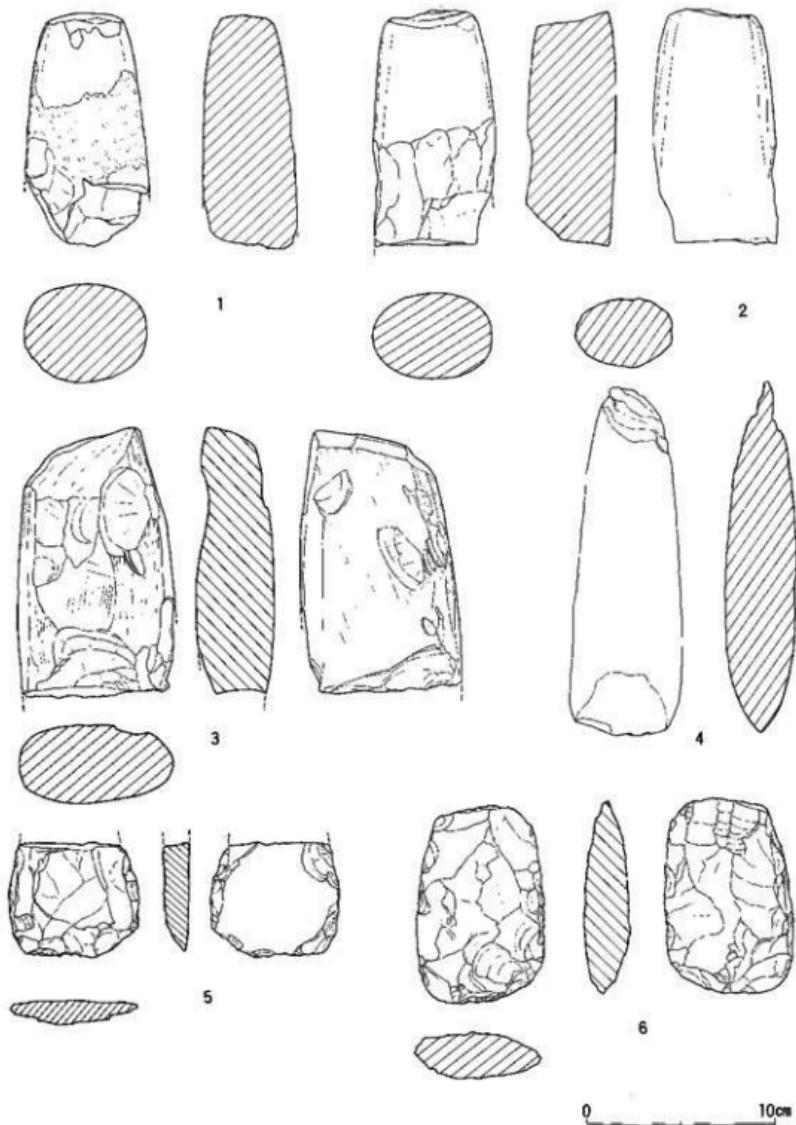
第37図 第V調査区出土遺物(石器)実測図



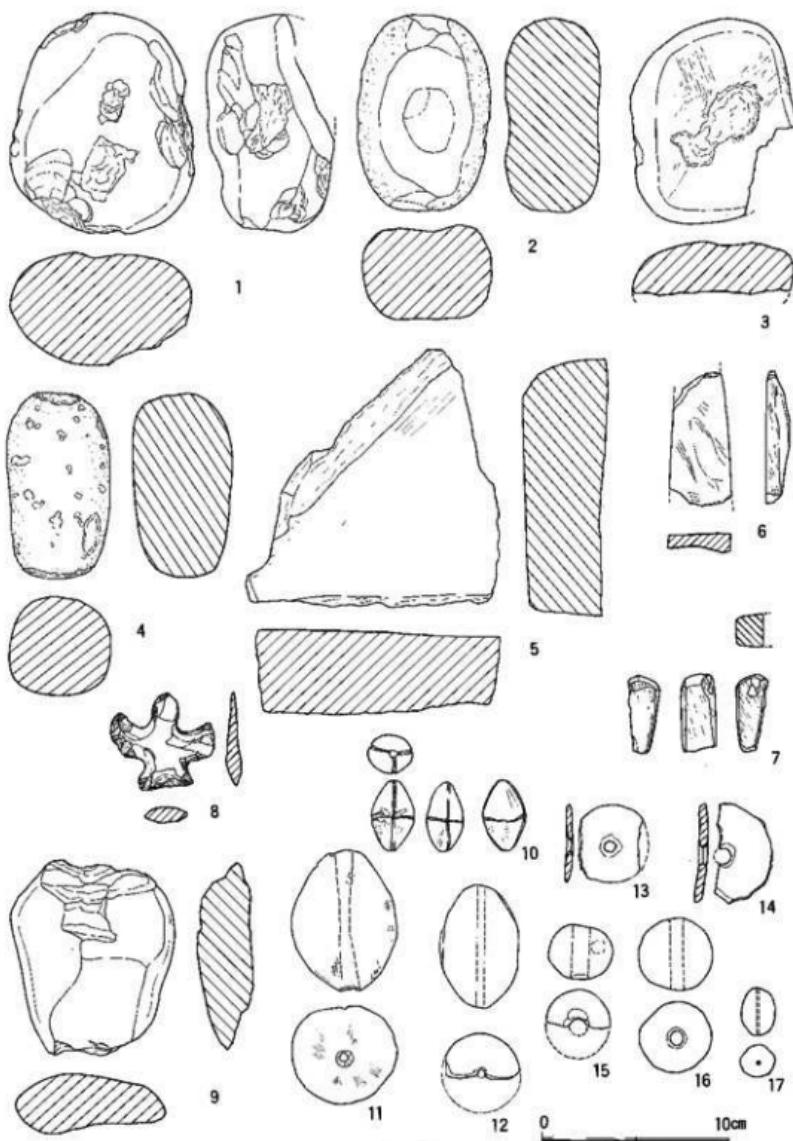
第38図 第V調査区出土遺物(石器)実測図



第39図 第V調査区出土遺物(石器)実測図



第40図 第V調査区出土遺物(石器)実測図



第41図 第V調査区出土遺物(石器,土鍤)実測図

められる。

この他、人形の壺形土器14が出土しているが、前回調査した際に出土したものと同一個体と考えられ文様の細部がやや異なるが、古墳時代前期頃のものと考えられる。

石 器（第37～41図）

石 鐵（第37図）

1～11は黒燧石製、1～4は平基式であり、1はやや小形のものである。5～11は、凹基式である。5、6は、わたりが浅く、その他はやや深めである。11は特に深いものである。12、13は、サスカイト製の凹基式である。14、15はスクレーパーと考えられる。

ナイフ（第37図 16）

旧石器の大形ナイフと考えられ、長さ7.0cm、幅4.2cmを測る。

石包丁（第38図）

1は、打製の完形品であり、刃部を細かく剝離している。2～8は、刃部を研磨している。2は完形品で扁平な石材の刃部から中程にかけて研磨痕が残っている。3、4は、欠損品で刃部のみである。5～8はかなり人形の石包丁である。8は、厚さ1.0cmを測り、一方の側面は切断面も研磨し整えられており、刃部は湾曲している。

石 鐵（第39図 1～5）

1は完形品で長さ14cmを測る。刃部には使用痕が残り、刃部と平行に磨痕がある。2の石材は、結晶片岩である。3は、幅の狭い形態のものである。4はやや大形で刃部が湾曲している。5も大形品と思われ、厚みのあるものである。6は、緑色凝灰岩の扁平な石材であり、玉の末製品と思われる。

石 斧（第39図 7～17、第40図）

7、9～11は、扁平片刃石斧である。7は緑色凝灰岩製である。9は長さに比べ幅と厚みのあるものである。

第39図12～17、第40図1、2、4は、鉈歯石斧である。第40図1は、着装のために中央部分に細かい敲打痕が全周している。2は同様に片面に敲打痕があり、表面には装着時の接着剤様のものの痕跡が認められる。4は結晶片岩製の完形品である。3は大形の石斧と思われるものでやや扁平なものである。5・6は打製石斧である。

磨 石（第41図 1～4）

1は表、裏と側面に敲打痕が認められる。2は片面に敲打痕が強く残っている。3は敲打痕と磨痕が残っている。4は上下に敲打痕が認められる。

砥 石 (第41図 5~7)

5は大形の砥石であり、表の面はかなり使用している。6,7は小形の砥石である。

十字形石器 (第47図 8)

基部から刃部に向かって細くなり、刃部は細かい剝離がなされている。

石 錘 (第41図 9~11)

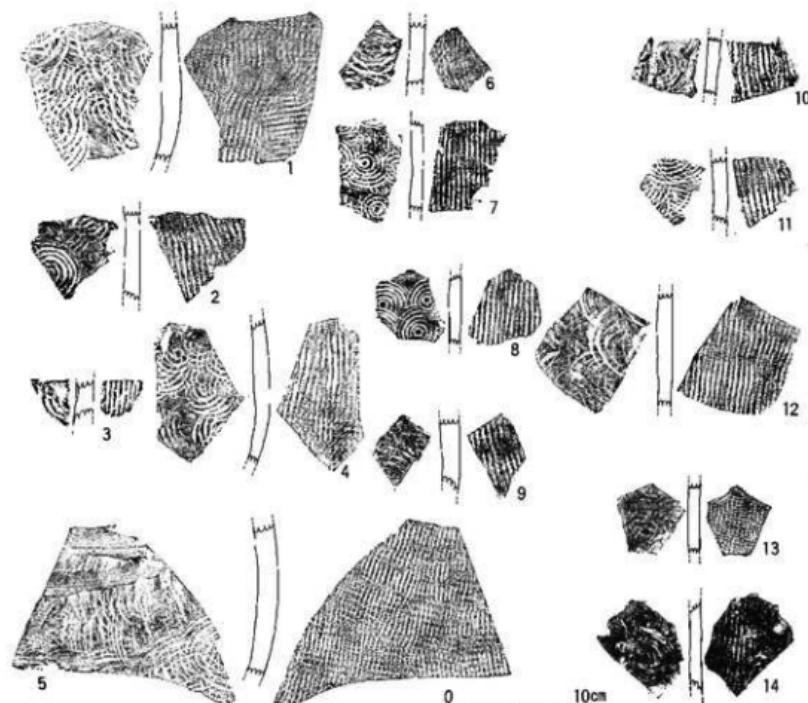
9は、内側に大きく剝離を行っている。10は細かい溝を周らしている。11は、両方から穿孔されている。

紡錘車 (第41図 13・14)

ともに土器片を転用した紡錘車である。

土 錘 (第41図 12~15~17)

いずれも、球形の土錘である。



第42図 石台遺跡出土遺物(須恵器)実測図

平安時代の遺物

須恵器

須恵器は、第1～3層にかけて出土している。

壺（第42図、43図 1～4）

1は、外面の平行叩きにやや幅を持ち、中の横方向の筋も明瞭に残っている。2～4、6～12、14も平行叩きの幅がやや広めであり内面は、同心円叩きの円が7個で各間隔は狭く、一部をナデ消している。3は焼成がやや瓦質に近いものである。壺（第43図3）は口縁部の外面の上部に波状文を施し、下部は横方向のナデ調整を施し、体部外面は平行叩きである。内面はやや粗い同心円叩きを施している。4は、壺であり、口縁部が短く、外傾している。体部の外面には粗い平行叩きが内面は粗い同心円叩きの後一部をナデしている。

瓦（第43図 5～8）

5・6・8は丸瓦、7は平瓦の破片である。

坏（第44図 1～9）

1は高台の付く坏であり、高台は低く、体部はやや外反気味に立ち上る。焼成がやや軟質である。2は、口縁端部に丸味を持ちやや厚いものである。4～6は、坏の底部で、底部は回転糸切り痕を残す。7・8は高台の付く坏である。9は、高台の付く皿である。いずれも底部回転糸切りにより切り離す。

壺（第44図 10～13）

10は、底部、口縁部を欠いている。体部に丸味を持つものである。12は、高台の付く壺であり、肩に稜を持つ。胎土が灰白色で焼成がやや軟質である。13は、短頭の壺であり、肩に鋭く稜を持つ。14は、双耳壺の破片と思われ、肩部に突帯が巡っている。

白 磁（第44図 15～21）

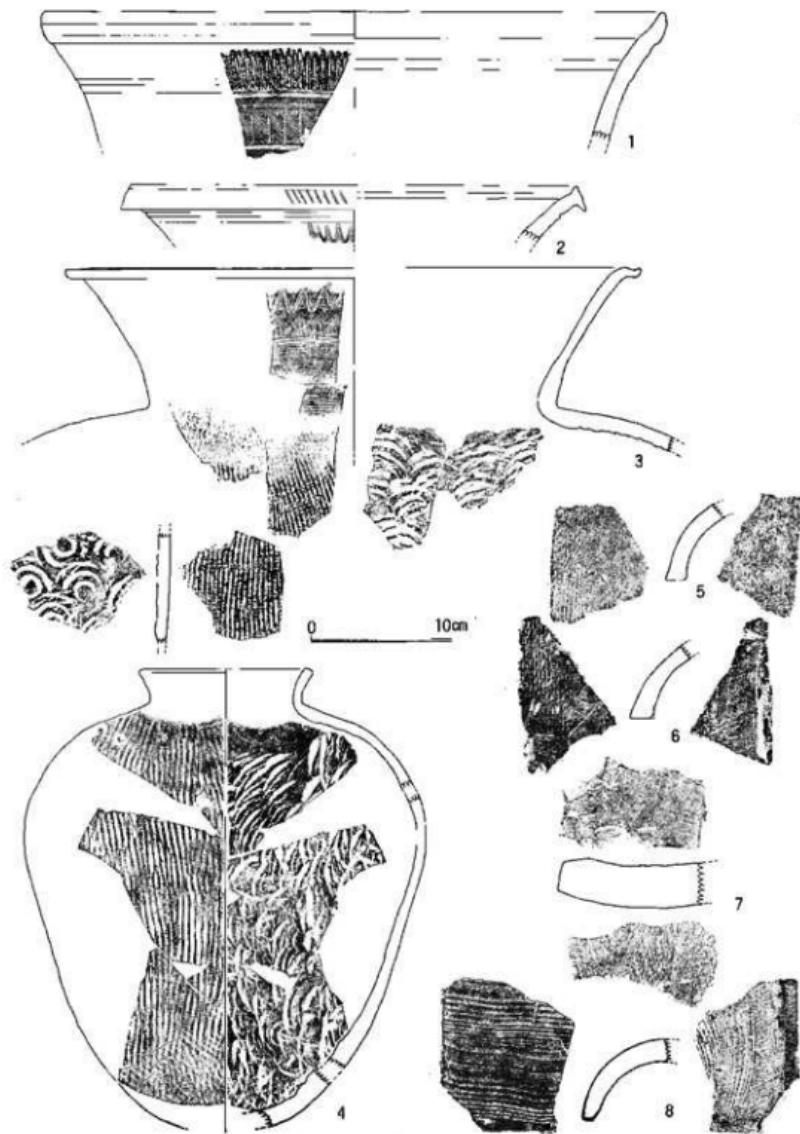
15は小さな玉縁の付く碗である。16～19は大きめの玉縁の付く碗であり、20、21はその底部分である。15は大宰府編年、I類-1、16～19がIV類に含まれる。

台付皿（第44図 22、23）

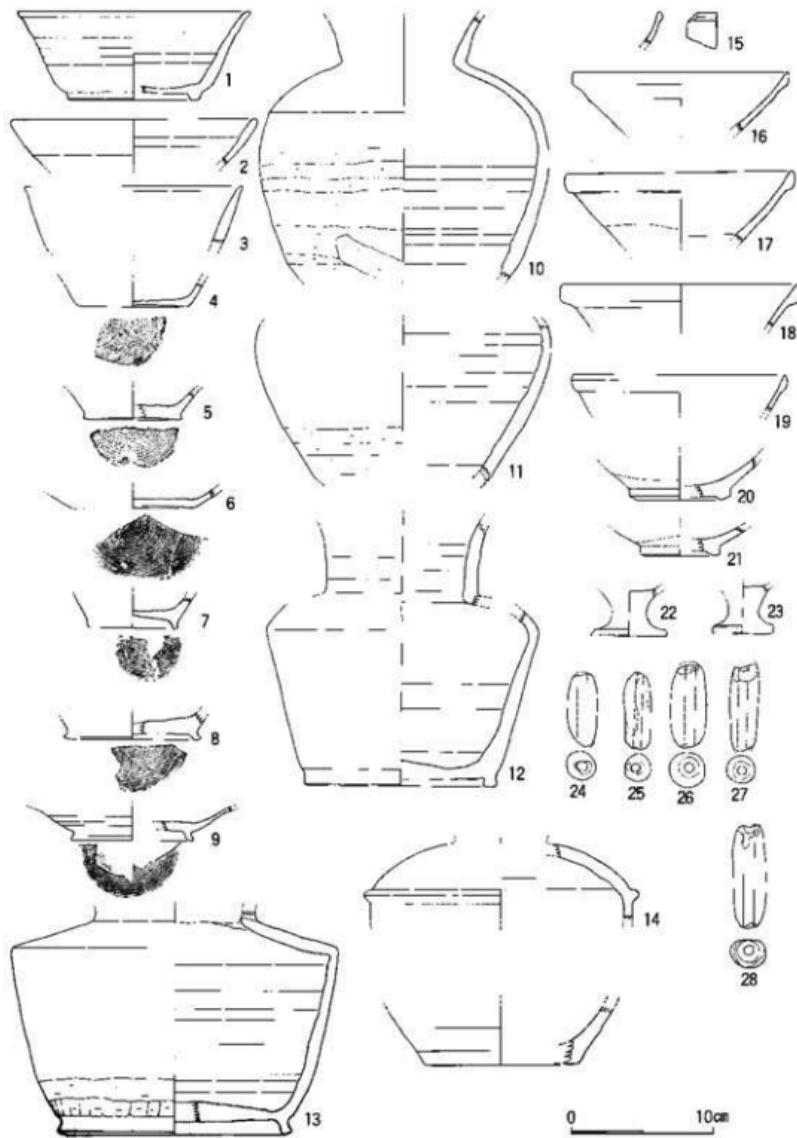
上質質土器の台付皿の台部の破片であり、底部を回転糸切りにより切り離している。

土 鍤（第44図 24～28）

いずれも管状のものである。



第43図 第V調査区出土遺物(須恵器)実測図



第44図 第V調査区出土遺物(須恵器、白磁、土鐘)実測図

V む す び

今回調査を行った石台遺跡では、IV区丘陵斜面において、弥生時代の住居跡、土壙、ピット群を検出し、V区の谷部からは繩文土器、弥生土器、平安時代の須恵器、白磁が出土している。

V区の遺構は、以下の時期である。

• SK-01, 02, 04	弥生時代中期中葉
• SI-01, 02, 04, 05, 06	中期後葉
• SI-01	後期初頭

弥生時代中期中葉には、土壙墓（SK-02）、貯蔵穴（SK-01）があり住居は検出していない。中期後葉になると住居SI-02, 03, 04, 05, 06が築かれている。これらの住居は、竪穴住居とするより、斜面を平坦にカットし獨立柱建物を建てたと考えられ、細長い建物であったようである。これらは、SI-02, 03, 05, 06とSI-04とSI-01周辺のピット群が同じレベルにあり、それぞれが独立した位置にあることから各住居が近い時期に互いの位置を意識した上で建物を築いていたようである。後期初頭にはSI-01があり、これはピット群の隅をかすめるようにして立地している。

V区から出土した弥生土器は中期後葉がほとんどであり、後期には激減している。

以上のことより石台遺跡の弥生時代の住居は、中期後葉が中心となっており、集落もその時期を中心として營まれたようである。県内における集落の立地は、中期中葉に微高地へも拡大しているが、石台遺跡は前期から引き続いた立地と思われる。

遺 物

V区から出土した弥生土器は、甕の体部内面下半に縦方向のヘラケズリが施され、口縁部に2本以上の凹線がめぐっており、頸部に貼付突帯を持つものもある。これらの土器は前回の調査では、中期後葉とされているもので、今回の調査では同時期の単純層と考えられる出土状況であった。壺については、体部の破片が少なく調整についてはやや不明の点もある。高环は、口縁外面、頸部、脚部に凹線、沈線を施しており、同様の時期であるが、器形はそれぞれ異なっており、一時期にもかなりバラエティがあるようである。

IV区SI-01出土の高环は、瀬戸内地域では後期初頭にみられる器形であり、他の甕も内面頸部以下ヘラケズリを施しており、この時期の特徴と思われる。

平安時代の遺物は、須恵器の焼片が出土しており、甕の外面には、やや幅の広い平行叩きを有し、内面の同心円叩きの細かいものが大部分で一部がナデを施しており、若干粗いものも含んでいる。口縁部の残る（43図3）は、口縁外面の上半に波状紋を施している。この特徴は、宍道町小松窯跡⁽¹⁾

出土の須恵器に類似しており、杯（第44図1）も器形と焼成がやや軟質な点から古曾志平廻田窯跡の杯に類似している。これらの点より、この須恵器の時期は平安時代前半、9世紀～10世紀にかけての頃と思われる。第44図10～12の壺類も同様の時期と思われる。白磁碗は、大宰府編年⁽²⁾、Ⅳ類より11世紀後半～12世紀頃と思われる。

以上の調査結果よりこの遺跡は弥生時代中期後葉、平安時代を中心とした遺跡であり、馬橋川川床の調査結果と考え合わせ、この付近はかなり長期的に集落が営まれていたと思われる。

註

1) 宍道町教育委員会「小松古窯跡群範囲確認調査報告書」『宍道町埋蔵文化財調査報告書3』

1983年

2) 横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入陶磁器について—型式分類と編年を中心として」

『九州歴史資料館研究論集』4集 九州歴史資料館 1978年

石台土器観察表

探査番号	出土地点	器種	胎土	焼成色	調査備考
2 区					
9-1	SK-06	上部器・變形土器	3mm以下の砂粒を多く含む	良 好 白褐～灰褐色	
-2	〃	〃 脚部	1mm以下の砂粒を多く含む	〃 茶白色	外面に朱を塗布
-3	SK-07	〃 變形土器	1mm以下の砂粒を含む	〃 赤褐色	
-4	〃	〃 脚部	2mm以下の砂粒を含む	〃 〃	全体に風化が著しい
-5	P-10	〃 扁脚環形土器	〃	白褐～灰黒色	
4 区					
12-1	SI-01 堆積土	赤生・變形土器	3mm以下の砂粒を多く含む	良 好 白褐～灰褐色	
-2	〃	〃 〃	3mm以下の砂礫を多く含む	〃 赤茶褐色	風化が著しい
-3	〃	〃 鉢形土器	3mm以下の砂粒を多く含む	〃 外：黒色 内：黄白色	
-4	SI-01 堆積土	〃 變形土器	4mm以下の砂を多く含む	〃 白褐～灰白色	底部に穿孔
-5	SI-01	〃 高环形土器	3mm以下の砂礫を多く含む	〃 白黄色	全体にやや風化している
-6	〃	〃 〃	4mm以下の砂礫を多く含む	〃 明白褐～灰褐色	
14-1	SI-02	〃 變形土器	1mm以下の微砂粒を多く含む	良 好 白黄色	
-2	〃	〃 〃	〃	〃 白黄色	外面に炭化物付着
-3	〃	〃 〃	2mm以下の微砂粒を多く含む	〃 暗褐色～明赤白色	全体に風化が著しい 外面にスス付着
-4	〃	〃 〃	1mm以上の微砂粒を多く含む	〃 暗灰褐～黄白色	
-5	〃	〃 〃	3mm以下の砂礫を多く含む	〃 黒～黒褐色	
-6	〃	〃 〃	2mm以下の微砂粒を多く含む	〃 白黄色	全体に風化が著しい
-7	〃	〃 〃	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃 黒～黒褐色	
-8	〃	〃 叠形土器	2mm以下の微砂粒を多く含む	〃 黄白色	全体に風化が著しい
-9	〃	〃 高环形土器	〃	〃 明黄白～白褐色	
-10	〃	〃 〃	〃	〃 灰褐～白黄色	
-11	〃	〃 脚部	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃 灰褐～灰褐色	全体に風化。外面に朱を塗布
12	〃	〃 底部	〃	〃 黄灰～白灰褐色	焼成後、穿孔
-13	〃	〃 〃	〃	〃 黑～黑褐色	
-14	〃	〃 〃	〃	〃 黄褐～白褐色	
17-1	SI-03	〃 變形土器	1mm以下の微砂粒を多く含む	良 好 暗黄～灰褐色	外面にスス付着
-2	〃	〃 〃	〃	〃 黄褐～白褐色	
3	〃	〃 〃	〃	〃 白黃～黃褐色	
-4	〃	〃 〃	〃	〃 灰褐～白黄褐色	全体に風化
-5	〃	〃 變形土器	3mm以下の砂粒を多く含む	〃 白灰色	
-6	〃	〃 底部	2mm以下の微砂粒を多く含む	〃 外：黒～灰褐色 内：黒褐色～白黄色	内面に炭化物付着

掲番 通号	出 土 地 点	器 種	胎 上	焼 成	色 調	備 考
17 - 7	SI-03	赤生・底 面	2 mm以下の微砂粒を 非常に多く含む	良 好	外: 黄白～黒色 内: 明灰褐色	
- 8	〃	〃 〃	1 mm以下の微砂粒を 多く含む	〃	外: 黄灰褐色～黒色 内: 黄白色	
- 9	〃	〃 〃	1 mm以下の微砂粒を 多く含む		外: 白灰褐色～黒色 内: 明黄白色	
- 10	〃	〃 壺形土器胴部	1 mm以下の微砂粒を 非常に多く含む	良 好	灰黃白色	
- 11	〃	〃 〃	2 mm以下の微砂粒を 多く含む	〃	外: 黒色 内: 脱灰褐色	
- 12	SI-03 堆積土	〃 壺形土器	〃	〃	白褐～灰褐色	全体にやや風化
- 13	〃	〃 〃	〃	〃	黄白褐色	外面にスス付着
- 14	〃	〃 〃	1 mm以下の砂粒を多 く含む	〃	黄白色	
- 15	〃	〃 〃	1 mm以下の微砂粒を 多く含む		暗灰色	
- 16	〃	〃 〃	〃	〃	白黄褐色	
- 17	〃	〃 〃	〃	〃	明黄褐色～白褐色	
- 18	〃	〃 脚 部	〃	〃	明白褐色～明灰褐色	外面はやや風化
- 19	〃	〃 〃	2 mm以下の微砂粒を 多く含む	〃	白褐～灰褐色	三角形の強剤をもつ
- 22	SD-01 床面	〃 壺形土器	3 mm以下の砂粒を多 く含む	〃	外: 黄～灰褐色 内: 黄色	外面にスス付着
20 - 1	SI-05, 06 堆積土	〃 〃	1 mm以下の微砂粒を 多く含む	〃	灰褐色	〃 〃
- 2	SI-05, 06	〃 〃	2 mm以下の微砂粒を 多く含む	〃	外: 黄～灰褐色 内: 黄白褐色	〃 〃
- 3	SI-05, 06 堆積土	〃 壺形土器胴部	1 mm以下の微砂粒を 多く含む	〃	外: 黄褐色 内: 黄褐色	
- 4	SI-05	〃 〃	2 mm以下の微砂粒を 含む	〃	灰黑色	内面は風化
- 5	〃	〃 底 部	〃	〃	灰褐色	全体にやや風化
- 6	〃	〃 脚 部	〃	〃	黄白～白褐色	全体に風化が著しい
22 - 1	SK-01 堆積土	赤生・壺形土器	2 mm以下の微砂粒を 非常に多く含む	良 好	外: 白黄褐色 内: 白灰褐色	全体に風化
- 2	〃	〃 頭 部	1 mm以下の微砂粒を 多く含む	〃	外: 黄色 内: 黑色	
- 3	〃	〃 底 部	1 mm以下の微砂粒を 非常に多く含む	〃	黑褐色～赤茶色	やや風化
25	SK-02 I層	〃 壺形土器	2 mm以下の微砂粒を 多く含む	〃	灰黄褐色～黒色	
27 - 1	SK-04	〃 〃	1 mm以下の砂粒を多 く含む	〃	明黄褐色～赤褐色	風化著しい
- 2	〃	〃 〃	〃	〃	明黄褐色～黑灰褐色	脚部に孔を有する
- 3	〃	〃 壺形土器	2 mm以下の砂粒を多 く含む	〃	白黄褐色	風化著しい
- 4	〃	〃 壺形土器	2 mm以下の砂粒を非 常に多く含む	〃	黄白～黑灰色	〃
5 区						
32 1	灰色粘土下層	縞文・壺形土器	3 mm以下の砂礫を多 く含む	良 好	輪系褐色	全体に風化
- 2	〃	〃 〃	〃	〃	外: 黄褐色 内: 黑褐色	風化著しい
- 3	〃	〃 〃	2 mm以下の砂礫を多 く含む	〃	外: 黄灰～灰褐色 内: 黑色	
- 4	灰色粘土	〃 〃	3 mm以下の砂礫を多 く含む	〃	外: 黄白～黄褐色 内: 黄～灰褐色	
5		縞文・壺形土器	3 mm以下の砂礫を多 く含む	良 好	外: 黄白～黄褐色 内: 黄～灰褐色	32-1と同一個体か

排号	出土地点	器種	治上	焼成	色調	備考
32-6	灰色粘土	織文・鉢形土器	3mm以下の砂粒を多く含む	良好	灰白褐色	
-7	〃	〃	〃	〃	〃	32-6と同一個体か
-8	暗茶褐色	弥生・壺形土器	4mm以下の砂粒を多く含む	〃	白灰～黄褐色	風化が著しい
-9	地山(礫)直上	壺形土器	3mm以下の砂粒を多く含む	〃	赤褐～灰褐色	〃
10	灰色粘土上面	壺形土器	3mm以下の砂粒を非常に多く含む	〃	黄白～灰色	
11	〃	〃	2mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃	灰～黄白色	風化著しい
-12	暗茶褐色土上	〃	2mm以下の微砂粒を多く含む	〃	無灰色	
-13	土器群	〃	2mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃	灰黑～灰褐色	
-14	〃	〃	〃	〃	灰褐～白灰褐色	
-15	灰色粘土	〃	〃	〃	白灰～灰褐色	
-16	〃	〃	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃	白黃褐色	
-17	暗茶褐色土上	〃	1mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃	黄白色	
33-1	〃	〃	2mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃	黄灰白～赤白色	
-2	灰色粘土	〃	〃	〃	白褐色	
-3	灰色粘土 暗茶褐色土	〃	2mm以下の微砂粒を多く含む	外：黄褐色 内：灰褐色		
-4	暗茶褐色土上	〃	1mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃	明黄茶色	
-5	北トレ褐色土	〃	2mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃	白～灰褐色	
-6	暗茶褐色土	〃	〃	〃	白灰色	風化著しい
-7	〃	〃	3mm以下の砂粒を多く含む	〃	黄褐～白褐色	〃
-8	〃	壺形土器頸部	2mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃	白褐色～褐色	
-9	〃	〃	1mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃	白灰色	
-10	灰色粘土上面	壺形土器	〃	〃	白褐～灰褐色	
-11	〃	〃	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃	黄白～灰褐色	全体に風化
-12	〃	壺形土器	3mm以下の砂粒を少く含む	〃	赤褐～灰褐色	
-13	暗茶褐色土上	〃	2mm以下の砂粒を多く含む	〃	白黄灰～灰褐色	外面にスス付着
-14	灰色粘土上面	〃	3mm以下の砂粒を多く含む	〃	黄灰褐～白褐色	〃
-15	東トレ	〃	2mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃	明黄白色	
-16	灰色粘土上面	〃	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃	灰白～暗灰褐色	外面にわずかにスス付着
-17	暗茶褐色土	〃	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃	暗白褐～灰褐色	〃
-18	北西セラス下	〃	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃	明赤褐～暗灰褐色	〃
34-1	暗茶褐色土	〃	〃	〃	灰白～白褐色	〃
-2	〃	〃	2mm以下の微砂粒を非常に多く含む	外：白褐色 内：灰白色		
-3	黑褐色土	〃	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃	暗灰褐色	〃
-4	灰色粘土上面	弥生・壺形土器	2mm以下の微砂粒を多く含む	〃	白灰～白褐色	〃

番号	出土地点	器種	胎土	焼成色調	備考
34-5		弥生・變形土器	2mm以下の鐵砂粒を多く含む	良好 黄白～灰褐色	外面にわずかにスス付着
-6	灰色粘土	ク ク	1mm以下の鐵砂粒を多く含む	〃	口縁部外面にスス付着
-7		ク ク	2mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	白灰褐色	
-8	暗茶褐色土	ク ク	1mm以下の鐵砂粒を多く含む	灰褐色	頸部に穿孔
-9	〃	ク ク	2mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	灰～白褐色	全体に風化
-10	〃	ク ク	2mm以下の鐵砂粒を多く含む	灰褐～明白褐色	
-11	東トレ	ク ク	1mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	黄灰白～黃赤色	
-12	暗茶褐色土	ク ク	1mm以下の鐵砂粒を多く含む	外：白褐色 内：灰白色	
-13	〃	ク ク	2mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	白褐～灰白色	
-14	〃	ク ク	1mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	黄灰白～白褐色	
-15	褐色土	ク ク	4mm以下の鐵砂粒を多く含む	灰～黄白色	
-16	〃	ク ク	2mm以下の砂礫を多く含む	黄灰～白褐色	
-17	ク	ク 器台脚部(?)	〃	明明白黄色	
-18	暗茶褐色土	ク ク	〃	灰褐色	
35-1		鉢形土器	2mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	白褐～灰褐色	
-2	茶褐色土	ク 高环形土器	〃	外：黑色 内：黄白色	外面に黒斑
-3	暗茶褐色土	ク ク	2mm以下の鐵砂粒を多く含む	黑灰褐色	
-4	〃	ク ク	1mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	黄白～茶白色	
-5	〃	ク ク	2mm以下の鐵砂粒を多く含む	外：白褐～灰褐色 内：黄白～白褐色	内面や風化
-6	〃	ク ク	2mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	白褐～黄褐色	内外面とも風化著しい
-7	灰色粘土	ク ク	2mm以下の鐵砂粒を多く含む	灰白～灰褐色	
-8	褐色土	ク 台付鉢形土器	4mm以下の砂礫を多く含む	黄白色	風化著しい
-9	暗褐色土	ク 高环形土器	2mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	明明白～灰色	全体にやや風化
-10	〃	ク ク	1mm以下の鐵砂粒を多く含む	黑褐色	全体にやや風化
-11	暗灰色粘土	ク ク	2mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	黄灰白色	
12		ク ク	1mm以下の鐵砂粒を多く含む	黄白色	外面に朱を塗布
-13	褐色土	ク ク	2mm以下の鐵砂粒を多く含む	白褐～灰褐色	
-14	黑褐色	ク ク	1mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	灰褐～黄白色	
-15		ク ク	1mm以下の鐵砂粒を多く含む	黄灰白色	
-16	暗茶褐色	ク ク	2mm以下の鐵砂粒を多く含む	外：白褐～灰白色 内：灰色	全体にやや風化
-17		ク ク	3mm以下の砂粒を多く含む	白褐色	全体に風化
-18		ク 高环形土器脚部	2mm以下の鐵砂粒を多く含む	外：灰褐色 内：暗灰色	
-19	黑褐色土	ク ク	〃	白褐～黄白色	
-20	灰色粘土	弥生・高环形土器 脚部	1mm以下の鐵砂粒を非常に多く含む	外：白灰褐色 内：暗灰色	

番号	出土地点	器種	胎土	焼成色	備考
36-1	暗褐色	弥生・底部	4mm以下の砂粒を含む	良好 赤褐色	
-2	灰色粘土	〃 〃	2mm以下の微砂粒を多く含む	外:白褐~灰褐色 内:暗灰褐色	
-3	茶褐色土	〃 〃	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃 黑褐色	
-4	北トレ	〃 〃	3mm以下の微砂粒を多く含む	〃 灰白~灰白褐色	
-5		〃 開部	2mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃 灰茶色	
-6		〃 〃	〃	〃 赤褐~灰黄褐色	全体に風化著しい
-7	暗褐色土	〃 〃	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃 暗灰~灰褐色	脚部に焼成前の穿孔
-8	〃	〃 〃	2mm以下の微砂粒を多く含む	〃 黄白~黄灰色	
-9		〃 〃	1mm以下の微砂粒を多く含む	〃 暗灰褐~黑褐色	内外面の一部にウルシ付着
-10	灰色粘土上面	〃 底部	2mm以下の微砂粒を多く含む	〃 灰~灰黑色	全体に風化。外面上にウルシ付着
-11	黑褐色土	〃 变形土器	2mm以下の砂粒を含む	〃 明赤褐色	
-12	東トレ	〃 〃	2mm以下の微砂粒を多く含む	〃 明白褐色	
-13		〃 变形土器	3mm以下の砂粒を多く含む	〃 白褐色	外面に朱を塗る
-14		上部器・变形成土器	2mm以下の微砂粒を非常に多く含む	〃 赤褐~灰褐色	
42-1	東トレ	須恵器・開部	砂粒少なく密	〃 寄灰色	
-2		〃 变形土器	〃	外:明灰色 内:灰白色	
-3		〃 調部	砂粒含まず、気泡が入る	不良	外:灰褐色 内:灰白色
-4		〃 〃	砂粒少なく密	良好	外:灰白色 内:灰褐色
-5	東トレ	〃 〃	〃	〃	明灰色
-6	黑褐色土	〃 〃	〃	〃	灰白色
-7		〃 〃	〃	〃	明灰色
-8		〃 〃	〃	〃	〃
-9		〃 〃	〃	〃	〃
-10	灰褐色	〃 〃	〃	〃	〃
-11		〃 〃	砂粒含まず密	〃	〃
-12		〃 〃	砂粒を含むが密	〃	外:暗灰色 内:灰色
-13		〃 〃	〃	〃	〃
-14		〃 〃	〃	〃	外:黑灰色 内:灰色
43-1		〃 变形土器	〃	〃	
-2		〃 〃	〃	〃	青灰色
-3		〃 〃	砂粒含まず密	〃	灰白~黑灰色
-4		〃 〃	砂粒少なく密	〃	暗灰色
-5		丸瓦	砂粒多いが密	不良	黄白色
-6		〃	〃	良好	暗い灰色

所蔵 番号	出 土 地 点	器 種	胎 土	焼 成 度	色	調 査 備 考
43-7		平瓦	砂粒少なく密	良好	灰白色	
-8	西トレ	丸瓦	"	"	外: 明茶灰色 内: 灰白色	
44-1		須恵器、环	"	やや乾渴	明茶灰色	
-2		" "	"	良好	明灰色	
-3	南テラス	" "	"	"	青灰色	
-4		" "	砂粒を含むが密	"	灰白色	
-5		" "	砂粒含まず密	やや乾渴	"	
-6		" "	"	良好	灰色	
-7		須恵器・高台付环	砂粒少なく密	"	外: 黑灰色 内: 灰色	
-8		" "	"	"	灰色	
-9		" "	砂粒含まず密	"	灰白色	
-10		須恵器・夜形土器	砂粒少なく密	"	明灰色	
-11		" "	"	"	灰色	
-12		" "	"	"	灰白色	
-13		" "	砂粒含まず密	"	青灰色	
-14		須恵器・双耳壺	砂粒少なく密	"	灰白色	
-15		白磁・碗	明灰色	"	白色	釉は透明でヒビが入る
-16		" "	白色	"	明灰白色	
-17		" "	明茶色	"	明黄白色	
-18		" "	明灰白色	"	淡綠白色	
-19		" "	白色	"	白色	
-20		" "	明灰白～明黄色	"	明灰白色	
-21		" "	黄灰白色	"	明灰白色	釉に気泡あり
-22	土師質土器 台付皿		1mm以下の砂粒を含む	"	明純白色	全体に風化
-23		"	"	"	黄灰白色	

石台石製品土製品観察表

通 番 号	出 土 地 点	遺 物 名	全 長 (現在長) cm	最 大 幅 cm	重 量 (現重量) g	石 材 備 考
12-7	SI-01	石錐	4.3	1.9	13.5	
-8	"	扁平片刃石斧	(10.5)	5.5	122.0	
-9	"	砥石	(3.7)	9.9	526	輕石ギ岩
-10	"		(0.5)	2.3	2.4	
-11	"		(6.8)	4.3	21.8	
15-15	SI-02		(2.9)	4.0	8.6	黒曜石
-16	"	土錐	2.5	(径) 2.5	11.9	(胎土) 0.5 mm 以下の 微粉を少量含む
17-20	SI-03堆積土	砥石	(6.5)	3.0	17.9	孔径 4 ~ 5 mm, 良成良好 色調 黒白 ~ 白褐色
-21	"		1.8	5.5		
20-	SI-05	石錐	3.6	1.6	3.1	黒曜石
22-4	SK-01	石鋸	2.3	3.4	3.6	結晶片岩
23-1	"	石錐	2.2	1.6	0.8	黒曜石
37-1	5 区	"	1.6	1.4	0.6	"
-2	"	"	2.0	1.5	0.7	"
-3	"	"	2.4	1.6	0.8	"
-4	"	"	2.3	1.6	1.1	"
-5	"	"	2.5	1.8	1.1	"
-6	"	"	1.4	2.0	0.7	"
-7	"	"	(1.6)	2.6	1.0	"
-8	"	"	2.4	1.5	0.6	"
-9	"	"	1.7	1.3	0.5	"
-10	"	"	(1.5)	1.7	1.0	"
-11	"	"	1.6	1.5	0.5	"
-12	"	"	2.6	1.8	1.1	サヌカイト
-13	"	"	2.3	1.4	1.0	"
-14	"	"	3.0	1.6	2.6	黒曜石
-15	"	"	(1.9)	3.0	3.0	"
-16	"	ナイフ形石器	(7.0)	4.3	59.55	安山岩
38-1	"	スクレイバ--	5.7	8.9	45.8	
-2	"	石包丁	7.8	13.3	112.7	
-3	"	"	4.5	5.6	14.2	軽石ギ岩
-4	"	"	3.7	4.4	14.0	
-5	"		13.0	12.1	265.3	安山岩

拂番 団号	出土地點	遺物名	全長 (現在長) cm	最大 cm	重量 (現重量) g	石 材	備 考
38- 6	5 区	石包丁	10.7	10.4	152.1		
- 7	〃	〃	10.0	7.1	62.3		
- 8	〃	石包丁	9.8	14.7	290.3		
39- 1	〃	石 錠	13.6	3.8	83.7	燧石板岩	
- 2	〃	〃	(5.7)	2.3	15.9	結晶片岩	
39- 3	〃	石 錠	(3.9)	2.0	10.1	燧灰岩	
- 4	〃	〃	(5.9)	7.2	94.2		
- 5	〃	石 錠	5.1	4.1	36.8		
- 6	〃	〃	(2.7)	3.5	4.2		
7	〃	扁平片刃石斧	8.4	4.6	74.7	燧灰岩	鋸歯多い
- 8	〃	石包丁	5.5	7.5	36.1		
- 9	〃	扁平片刃石斧	7.5	5.8	156.6	砂質・ギ岩	
- 10	〃	石包丁	2.6	6.6	16.4		
- 11	〃	扁平片刃石斧	(5.4)	3.1	37.7		
- 12	〃	始刃石斧	(5.6)	5.5	158.7		
- 13	〃	〃	5.4	5.8	225.2		
- 14	〃	〃	11.3	6.3	505		
- 15	〃	〃	(8.9)	5.6	229.0	安山岩?	
- 16	〃	〃	(10.1)	5.4	363.0		
- 17	〃	〃	10.9	5.6	89.4	圭質泥岩	
40- 1	〃	〃	(12.4)	5.0	610		
- 2	〃	〃	12.3	6.5	650	ギ岩	
- 3	〃	石 斧	(14.3)	8.3	860	ギ質シルト	
- 4	〃	始刃石斧	18.6	5.9	565		
- 5	〃	打製石斧	(6.2)	6.9	78.9	安山岩	
- 6	〃	〃	10.5	6.8	233.7	ギ質砂岩	
41- 1	〃	敲 石	11.7	9.8	970		
- 2	〃	〃	10.3	5.0	640		
- 3	〃	〃	11.4	8.6	342.2		
- 4	〃	〃	9.8	5.3	449.4		
- 5	〃	砥 石	13.6	13.5	1.50		
- 6	〃	〃	(7.1)	3.4	37.5		
- 7	〃	〃	4.1	1.8	17.9	ギ質シルト	
- 8	〃	十字形石器	5.2	5.5	16.7	安山岩	

探査番号	出土地点	遺物名	全長 (現在長)cm	最大幅 cm	重 番 (現重量)g	石 材	備 考
41-9	5区	石錘	10.4	8.7	291.8		
-10	"	"	3.7	2.4	12.7		全体に磨き
-11	"	"	7.5	5.6	157.0		"
-12	"	土錐	6.6	4.1	51.8	(胎土) 1mm以下の微砂粒を多く含む	孔径4mm、焼成良好 色調灰黒色
-13	"	劫鉢車	(径) 5.2		7.5	(胎土) 1mm以下の微砂粒を多く含む	孔径8mm、焼成良好 色調黄白~灰色
-14	"	劫鉢車	(径) 5.2		7.5	(胎土) 1mm以下の微砂粒を多く含む	孔径8mm、焼成良好 色調灰黒褐色
-15	"	土錐	2.9	(径) 3.4	17.5	"	孔径9mm、焼成良好 色調灰黒褐色
-16	"	"	3.9	(径) 3.8	49.9	(胎土) 3mm以下の砂粒を含む	孔径7.5mm、焼成良好 色調黄褐色~赤褐色
-17	"	"	2.5	(径) 1.8	7.3	(胎土) 1mm以下の微砂粒を多く含む	孔径1mm、焼成良好 色調白黃~白褐色

図 版



石台遺跡遠景(北東より)

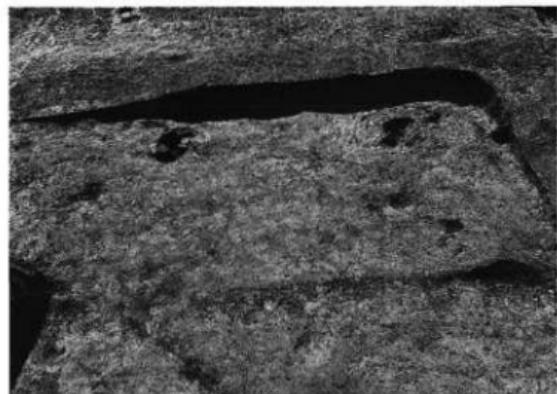


I 区全景(西より)



II 区全景(東より)

図版2



II区SI-07(北より)



SK-06,07(東より)



SD-04(北より)



III、IV区全景(西より)

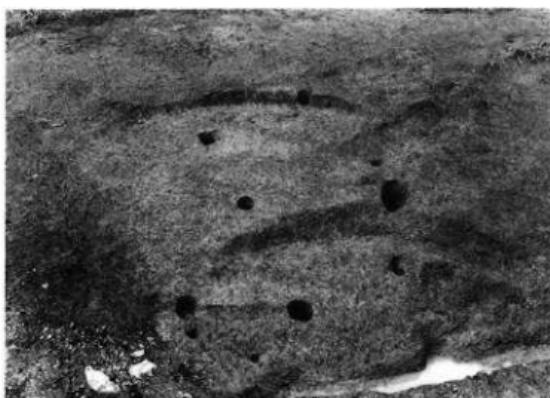
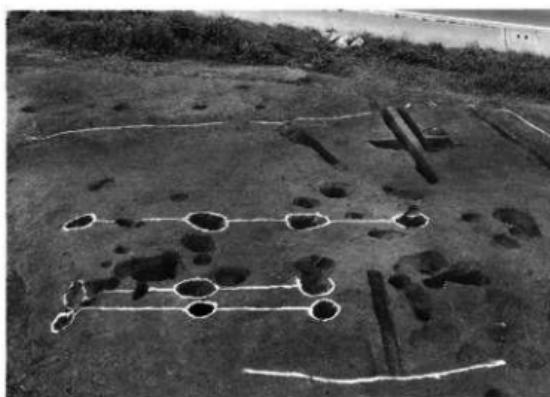


SI-01(東より)



SI-02(北より)

図版 4





SK-01(南より)

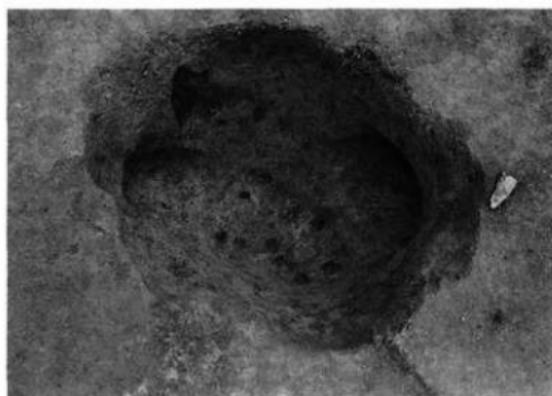


SK-02(北より)



SK-04(北より)

図版 6



SK-04完掘状況



SK-05(西より)



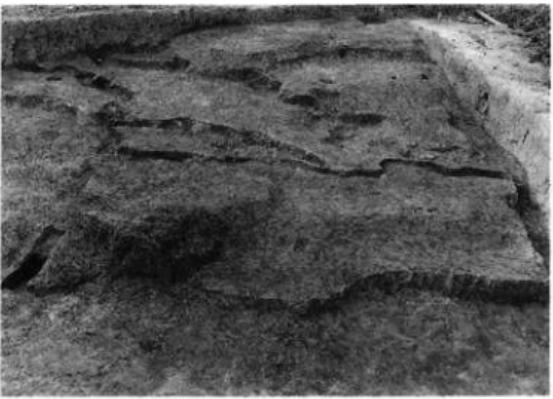
SX-01(南より)



V区全景(北より)

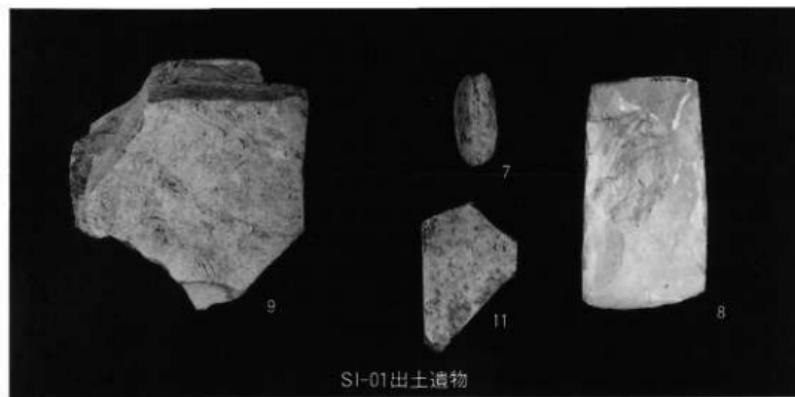
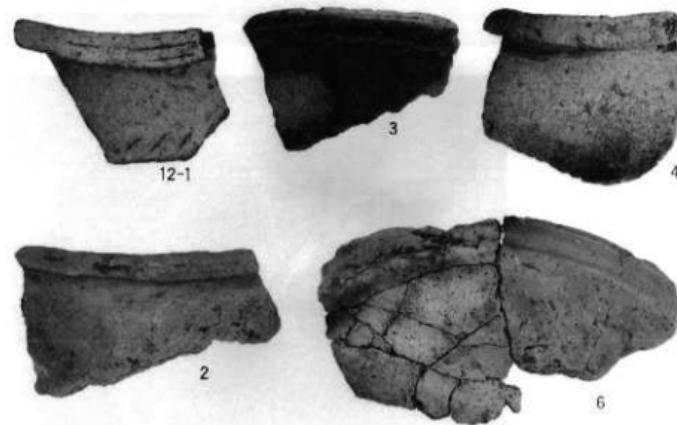
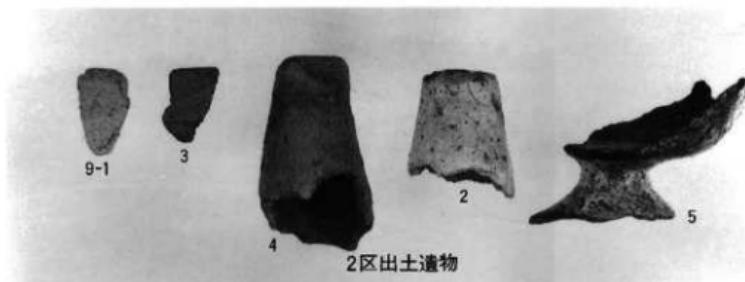


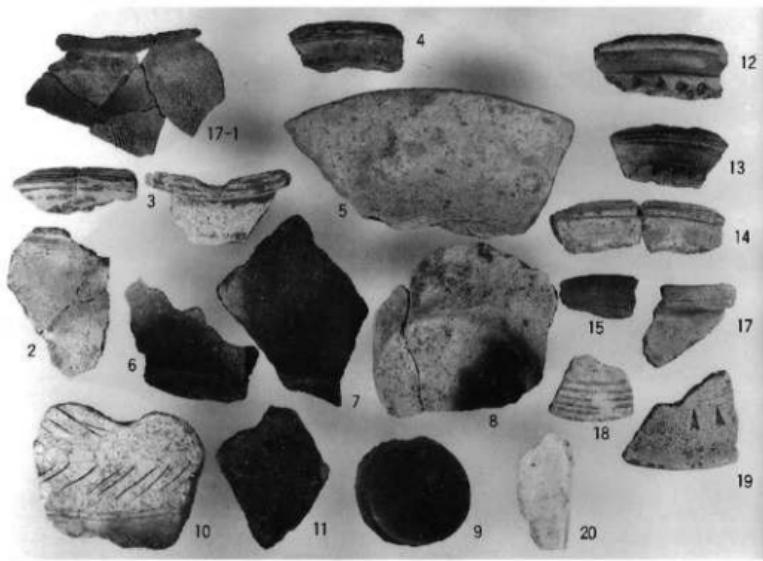
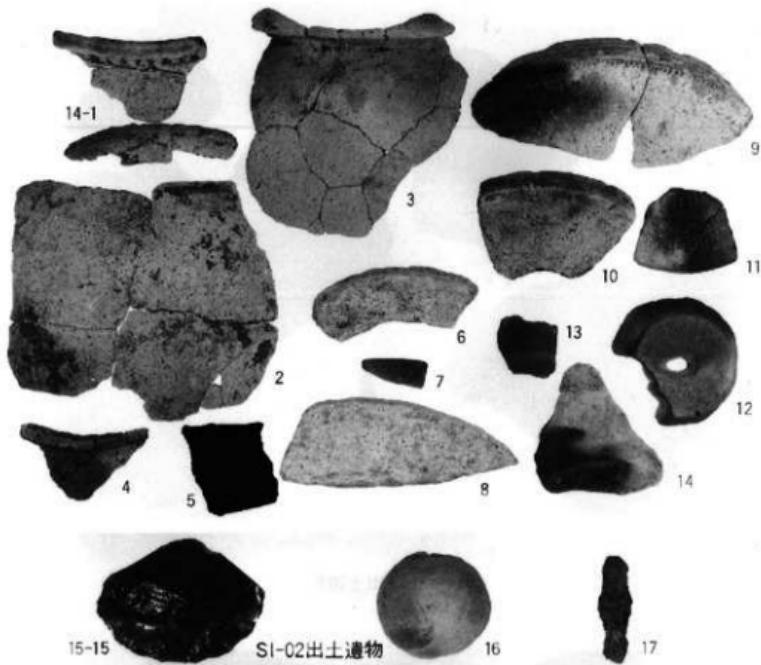
遺物出土状態



SI-08、SD-05、06、07、08
(東より)

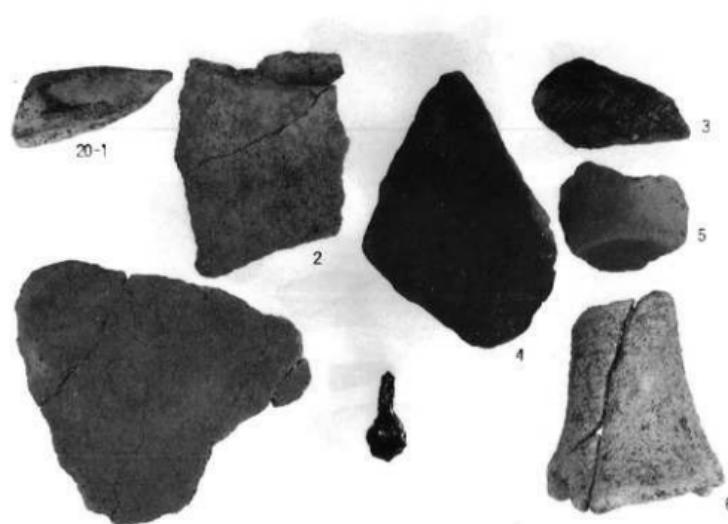
图版 8



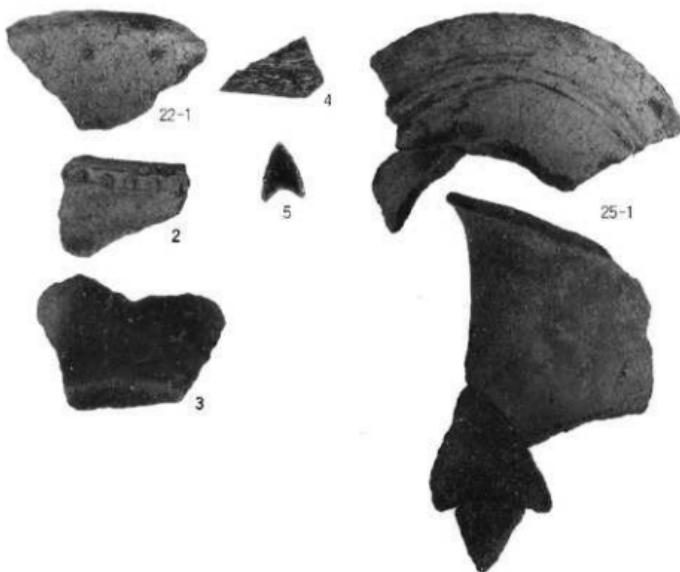


SI-03出土遺物

図版10



SI-05、06出土遺物



SK-01、02出土遺物



2



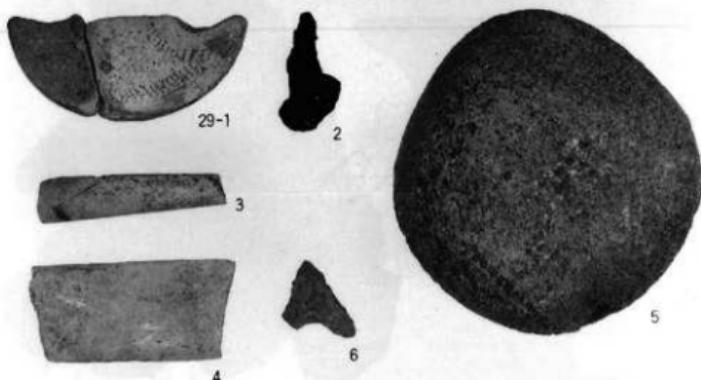
4



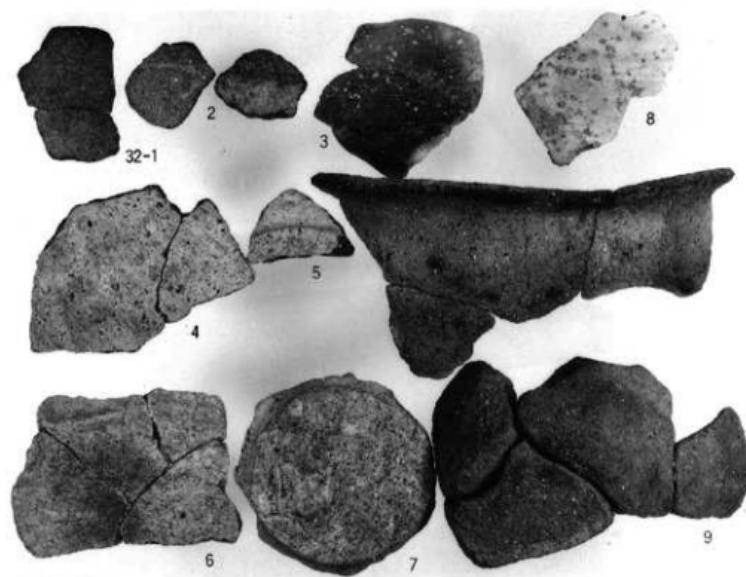
27-1

SK-04出土遺物

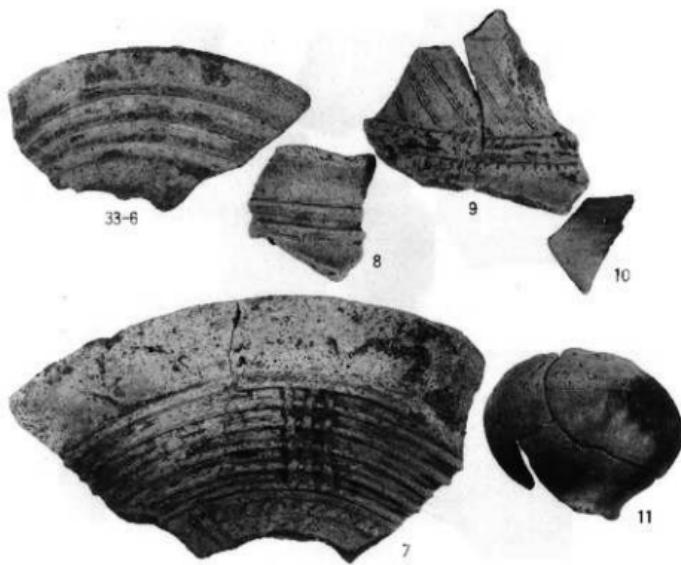
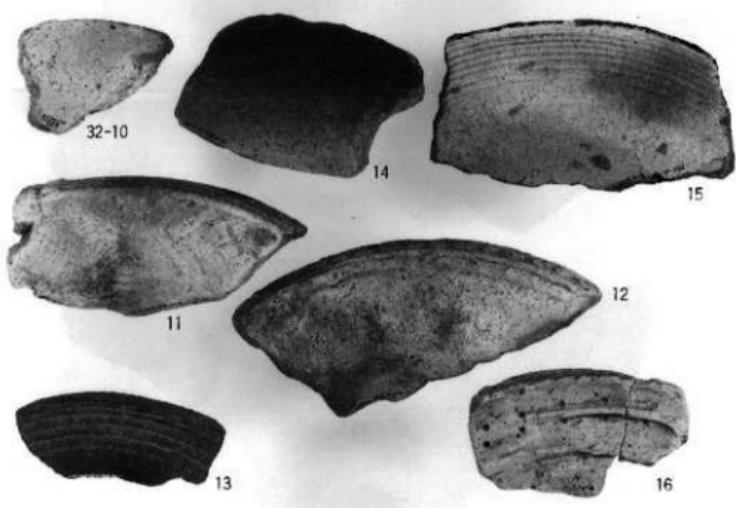
図版12



SX-01他出土遺物

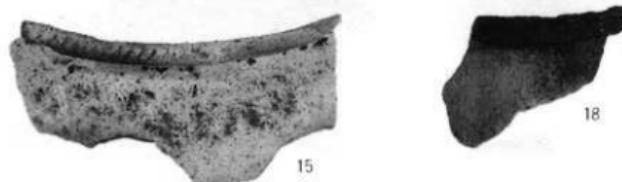
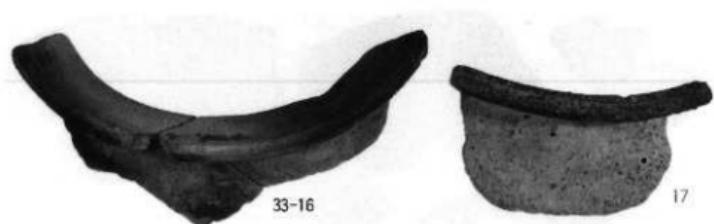


5区出土遺物(縹文土器、弥生土器)

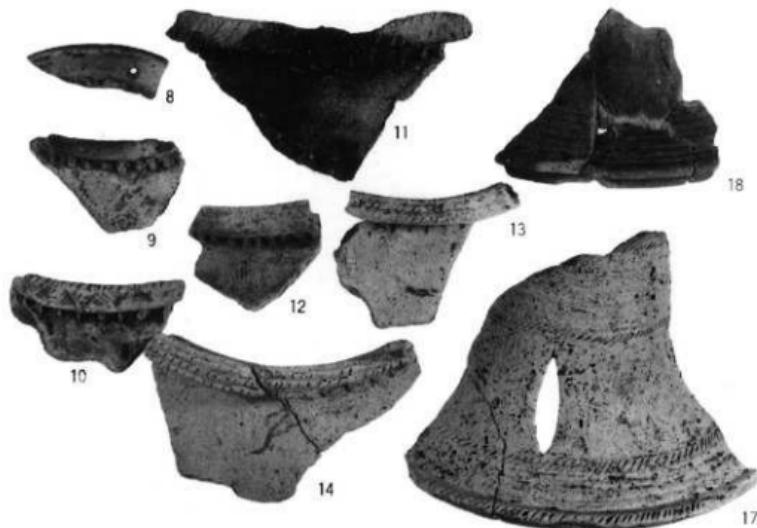
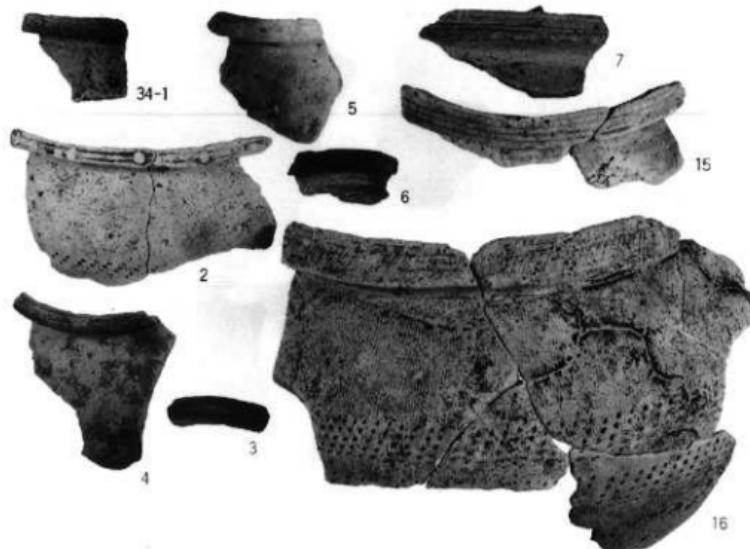


V区出土遺物(弥生土器)

図版14

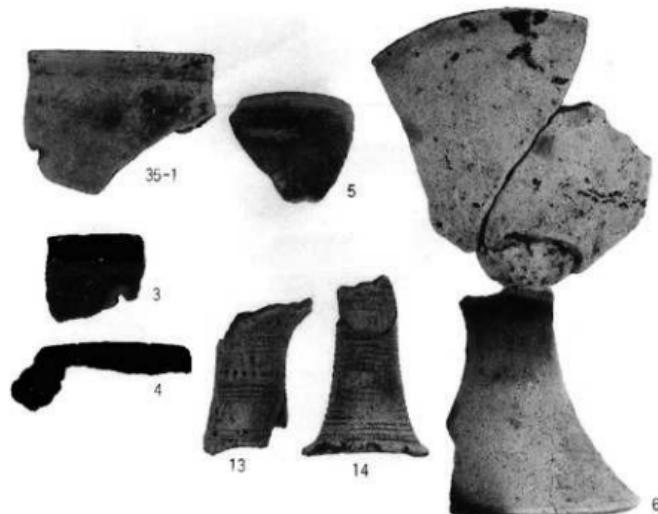


V区出土遺物(弥生土器)



V区出土遺物(弥生土器)

図版16

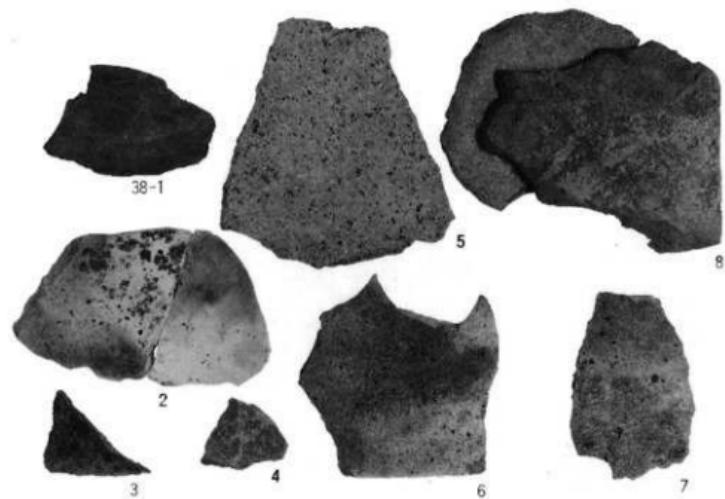
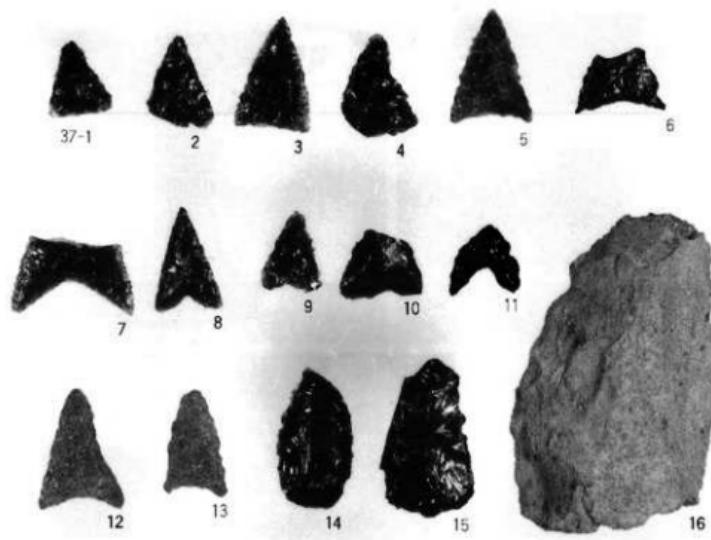


V区出土遺物(弥生土器)

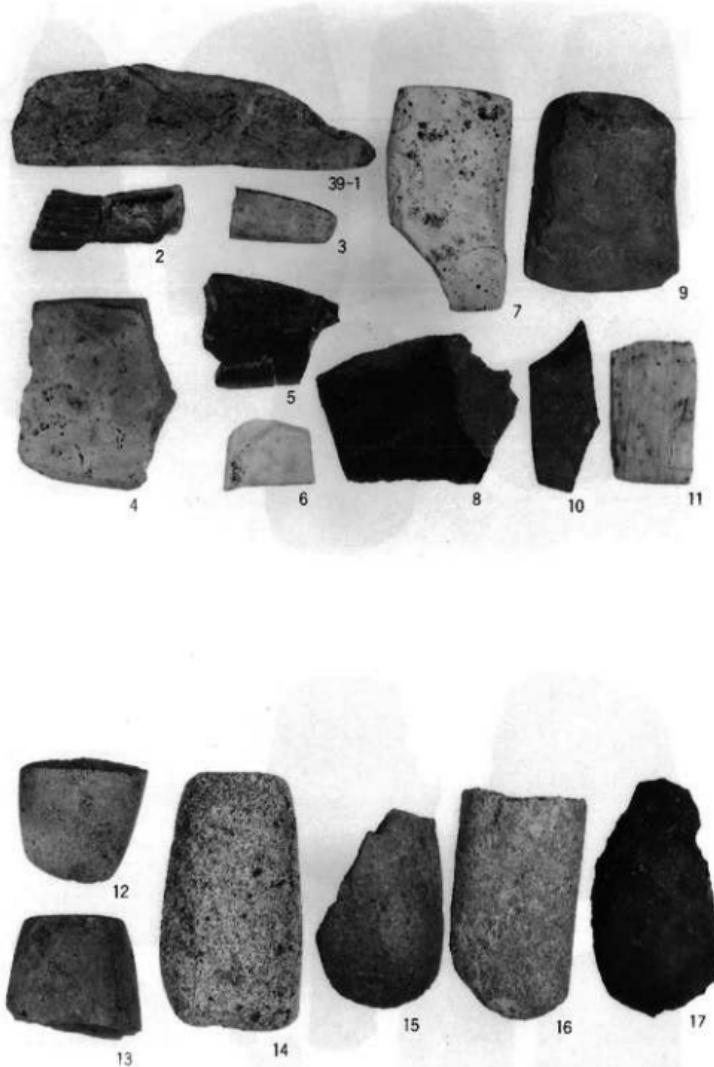


V区出土遺物(弥生土器・土師器)

図版18

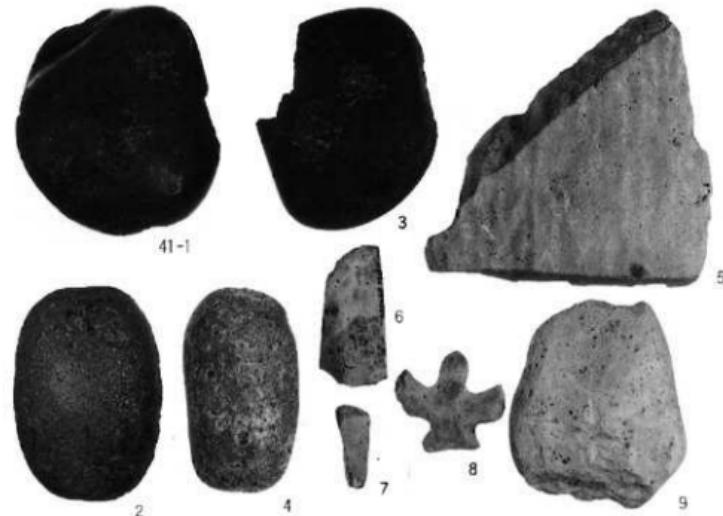
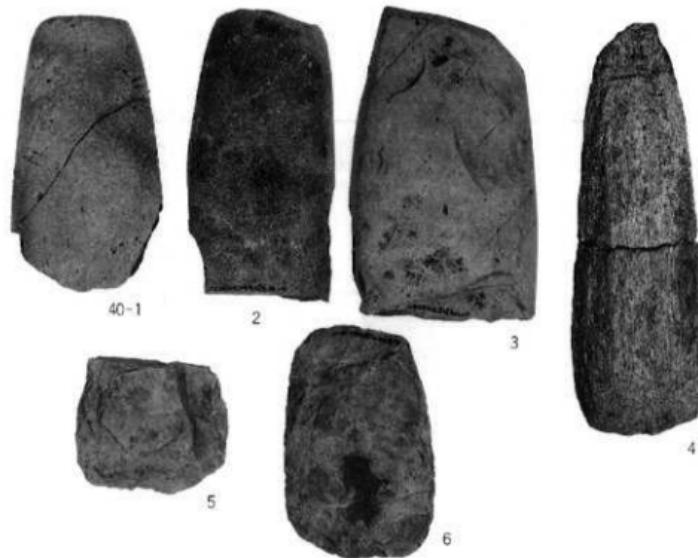


V区出土遺物(石器)

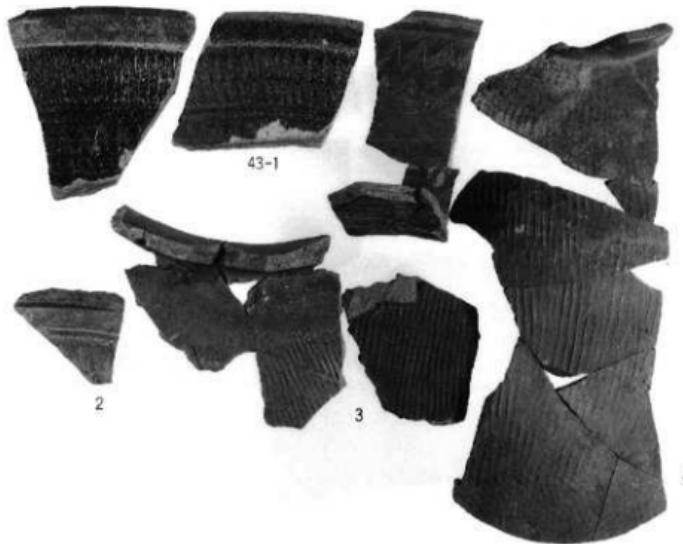
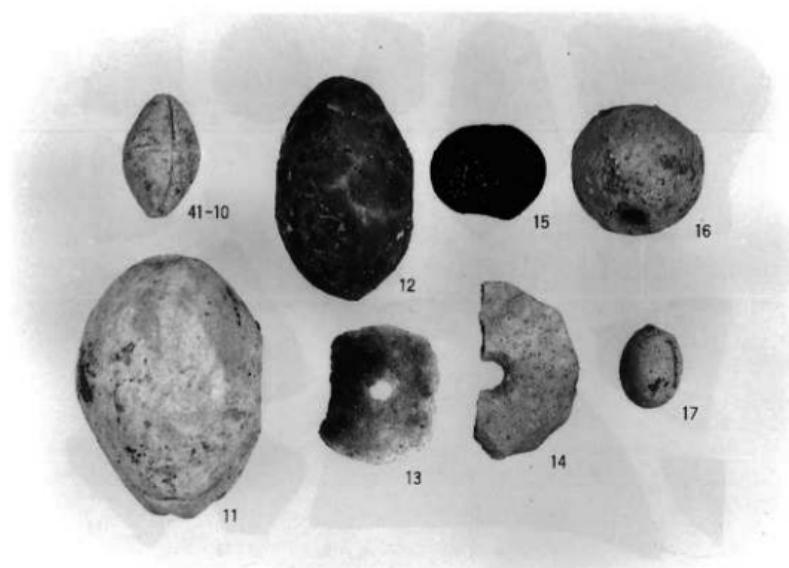


V区出土遺物(石器)

図版20

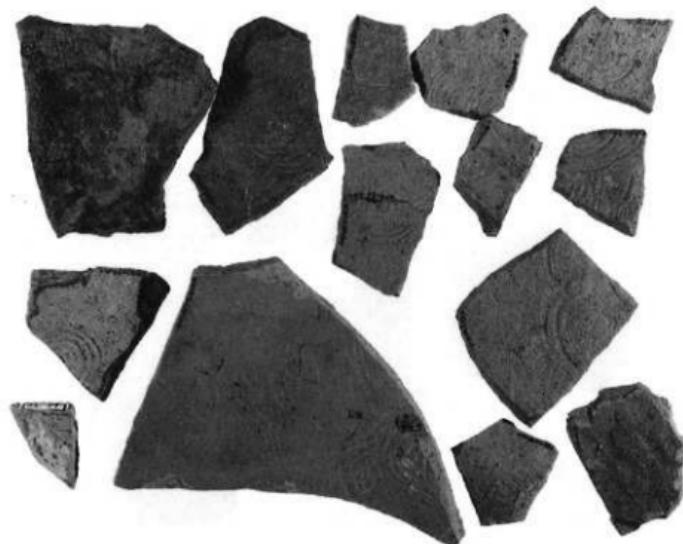
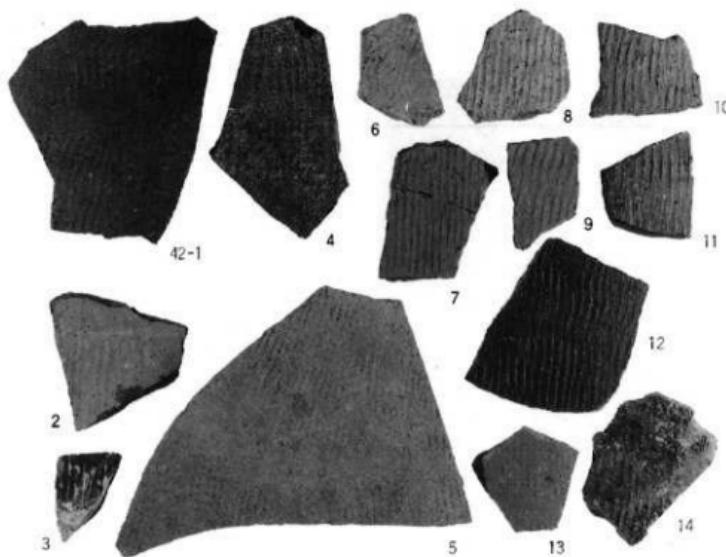


V区出土遺物(石器)

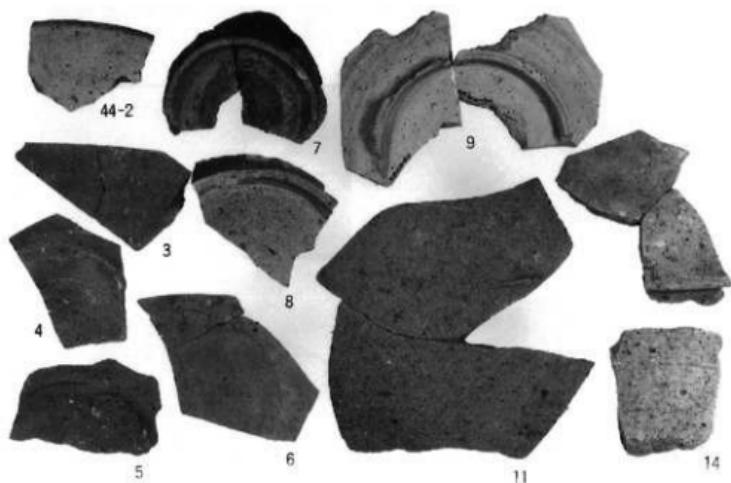


V区出土遺物(石錘、土錘、須恵器)

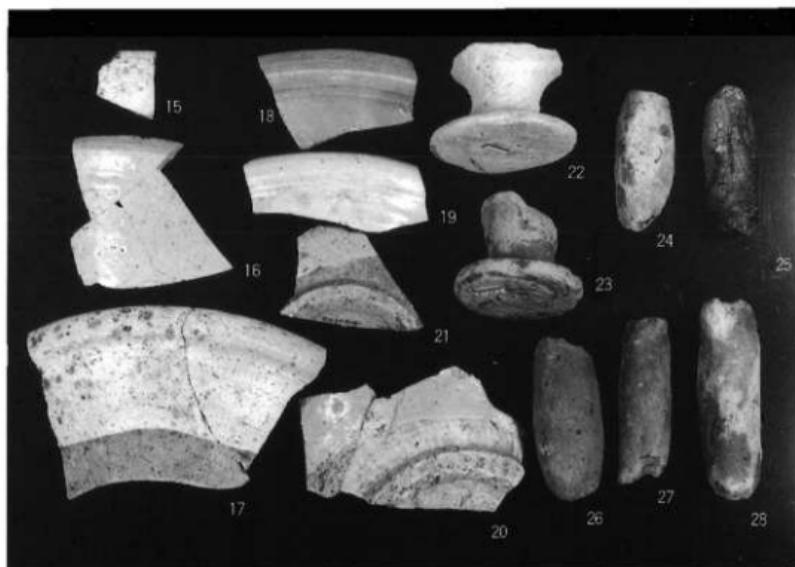
図版22



V区出土遺物(須恵器)

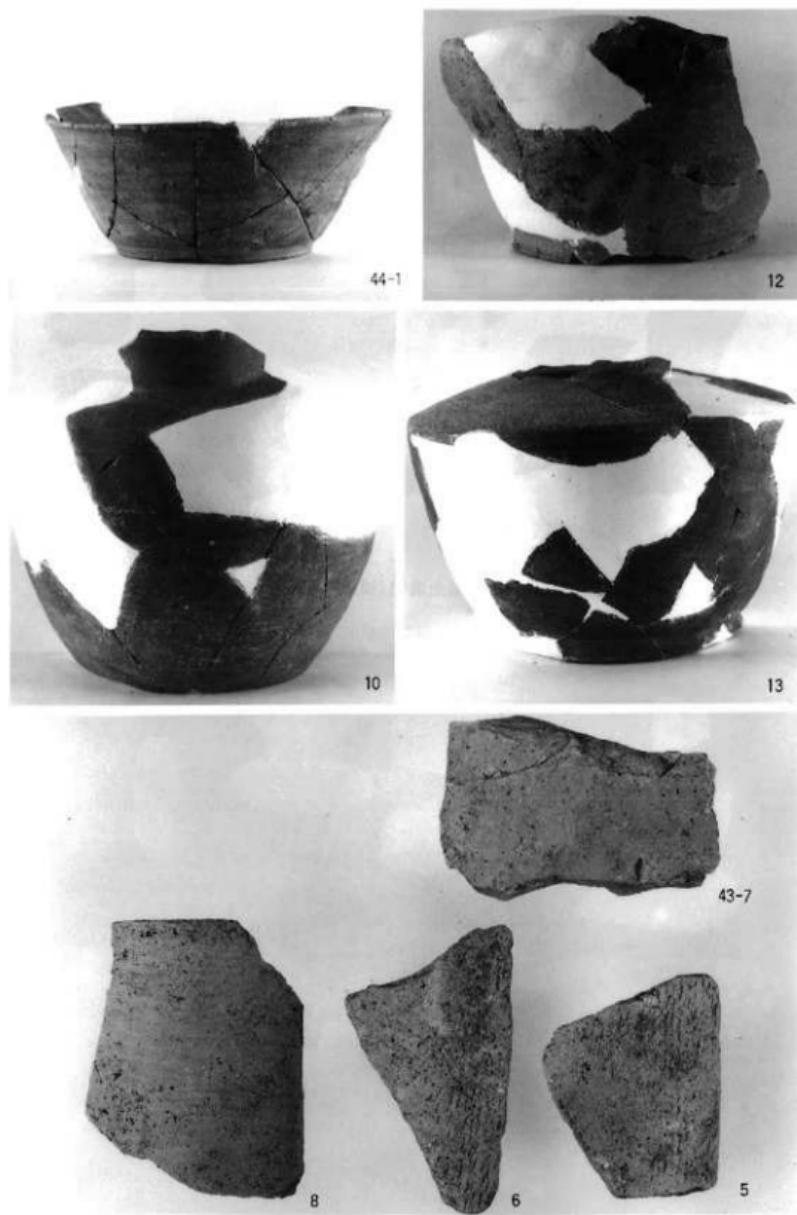


5区出土遺物(須恵器)



5区出土遺物(白磁、土鍤)

図版24



5区出土遺物(須恵器、瓦)

平成元年3月発行

国道9号線バイパス予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ
(石台遺跡)

編集・発行 島根県教育委員会
松江市殿町1番地

印刷・製本 有限会社 谷口印刷
松江市母衣町89番地

これは、発行者の了解を
得て当協会が増刷・頒布
するものである。
島根県文化財愛護協会